
とある魔術の頂上戦争

九条 水菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術の頂上戦争

【Nコード】

N5727X

【作者名】

九条 水菜

【あらすじ】

9月28日：上条当麻はマンホールに落ちた。そして辿りついたところはドブ臭い下水道……ではなくて、『白ひげ海賊団』の船だった。しかも、これからエースの処刑を止めるためにマリンフォードへと向かう途中の……

プロローグ（前書き）

新連載です！不定期更新ですがよろしくお願ひします。

もし、誤字脱字、誤りがあったら、ご指摘してくださいとうれしいです。

プロローグ

9月28日

そう……その日も上条当麻は、朝から「不幸」だったと断言できた。

朝から同居人のシスターさんに頭を噛まれ（彼女の好きなアニメの録画を消してしまったからだ……）

学校へ行く途中で2回くらい車と衝突しそうになり（焦って信号無視をしたからだ……）

自販機に2000円飲み込まれたり（よく考えてみると、以前もこの自販機に飲まれた気がする……）

だが、それだけだったのなら、上条当麻の許容範囲内だっただろう。事実……彼も、この時までは「仕方ない」と諦めていた。

そう……この時までには……

そのあと彼は、家……と言っても学生寮だが……に一応、帰宅。制服のまま夕食のしたくをしている。

「ねえ、とうま、とうま……とうまってば……！」

居間で声を張り上げているのは、同居人の禁書目録インデックスという名のシスター。

『シスターさんと高校生が同居しているってどういうシチュエーション!?』

っと思うだろうし、説明がほしいに違いないが……それは上条当麻自身も言えることなので、省かせてもらう。

そう……実は、彼には夏休み上旬以前の記憶がない。何故、記憶が飛ぶような事態になったのか分からないが、とにかくにも、インデックスというシスターの少女と出会った時の記憶がないのだ。だから、どうして彼女が、この家に居候しているのか分からない。

「とうま! ねえ聞いている!? もしかして、シカトっていうやつかも!?!」

「はいはい、行きますよ。なんですか?」

火を止めて上条が居間へ向かうと、インデックスは雑誌に釘付けだった。

「ねえねえ、とうま!! これ見てよ!!」

「ん? ……なんだ?」

「見て分からないの? 海賊の話だよ!!」

「海賊? ……ああ……ワンピースね……」

めちゃくちゃ最近はやっている漫画……少しなら上条も内容を知っていた。

「あのね、この漫画って…」

「はいはい…どうせ『悪魔の実』はナンタラの魔術の応用で生み出されたもの』とか『ワンピースの正体はウンタラ錬金術の応用』みたいなことだろ？」

「…とうまゝ魔術を馬鹿にしてるでしょ…」

冷めた目をするインデックス。

「馬鹿になんてしてませんよ。……ん？」

ポケットの中の携帯が音を立てた。

「ん？…メール？」

差出人は不明…

「『上条当麻…今から下のコンビニにすぐ来られたし』？誰だこれ？…：まあ、行かないと、さらに不幸になったら嫌だしな…
わりいインデックス。ちよつと出かけてくる。」

「とうま。どこか行くなら、お菓子買ってきてほしいかも。
スフィックスが勝手に食べちゃって…」

見てみると爪らしきものでズタズタに引き裂かれたお菓子の袋が散在していた。

「はいはい…買ってきますよ。」

上条は外に出た。

で、コンビニの前まで来たわけだが、誰もいない…しかたないので先にインデックスの要件を済ませることにした。

「…まったく…だれもいねえな…帰るか…」

コンビニの袋を下げて歩き始める…だが……

足が地面に着かない……？

「う…うわああああああ！！！！！！！！」

上条当麻はマンホールに落ちた…どこまでも…どこまでも深いマンホールに……

第1話…マンホールを抜けるとそこは…

…上条当麻は、マンホールの中をダイビングしていた。

背中から落ちているので、下の様子が全く見えないのが、怖い。ただ、黒い空間だけが、上条の周りにあった。

しかし、いつまでも落下しているわけがない。これはマンホール。いつかは下水道にたどり着くはずだ。

…いずれ来るであろう衝撃を予想し、思わず上条は目をつむった。

バsshャーン！！！！

ゆっくりと目を開けると、もやで視界が悪いが、一面茶色の世界だった。

…そしてこの時…上条は、はっきりしない意識の中で、妙な事に気が付いた。

自分は、どこにでもあるマンホールに落ちた。ということは、辿りつく先は底冷えするような下水のはず。

なのに、今…自分が浮かんでいるのは水…じゃなくて、ちょうどいい感じのお湯……

下水道といえば、誰もが口元を覆うドブ臭さで充滿しているはずなのに、鼻に入ってくるのは、どこことなく甘い匂いだった。

それ以前に、下水道なら天井が茶色のわけがない…もつと…汚れた灰色のはずだ。

上条は、そつと立ち上がった。……幸いなことに、お湯は浅いようで、ちゃんと足の裏が地面についた。

お湯は自分のヘソの位置までしかない。

もやで視界が悪い中、ゆっくりあたりを見わたす。

見ると、悪い視界の向こうで、何人かの人影が身を寄せ合っているのが見えた。

「あのー、すみません。ちょっと尋ねたいことが…」

ココまで口に出した時、上条はあることに気が付いた。

まず、人影が恥じらうような仕草をしているということ…

その次に、その人たち全員が、何も身にまわっていないということ…

最後にその人影が…

「「「キャアアアアアア！！！！！」」」

全員女であったことだ。

突然、落ちてきた人物が男であるとは分かったからなのだろうか？
とにかく、突然の出来事に放心状態だった彼女らは金切り声を上げると、桶やら石鹼やらを投げてきた。

「いや、待ってください！！！！すぐに出ていくんで！！！！」

「ナースが入浴だって知っていて入ってくるなんて何様！？」

「恥を知らないさい！！！！」

「五体満足で帰れると思ったら、大間違いよ！！！！」

彼女らは攻撃の手を止めなかった。

むしろ、攻撃力や迫力が増している気がした。

「不幸だ！！！！」

上条は石鹼やら桶や、シャンプーやらリンスのボトルを、かわしな
がら、逃げるように風呂場から出た。

(なんで、マンホールの下に銭湯が広がっているんだ!？
いや…そんなことよりも、まずは上を目指そう!! 地上へ戻らなく
ては!!！)

上条は、ひたすら走った。途中でなんか人とすれ違った気がするが、
今はそんなところではない。
ただひたすら上を目指した。

「出口か!？」

階段を上り切り、扉を開けると、確かにそこは外だった。

「……なにこれ？」

耳に入ってくるのは波の音……だけ……。

そう…たどり着いたのは地上ではなく…海の上…正確に言えば、ど
こかの船の上だった。

第2話 空から落ちてきた少女

上からは眩し過ぎる太陽が肌をやく。：頬を撫でる風には潮の香りが混ざっていた。

リゾート地に早変わりできる気候の中で、上条当麻は縄で縛られていた。

周りにいるオッサンたちの気迫に負けないように、上条は精いっぱい声を張り上げる。

「さっきから言ってるじゃないですか！

マンホールを抜けたら何故か女湯で、人畜無害な上条さんは、あわてて地上に戻るため外に出たら何故か甲板で船の上だったんですって！！！！」

彼に『この場から逃げる』という考えが全くなかったので、正直に本当のことを話す。

上条はいままで…といっても記憶にある限り、かなり喧嘩をしている。

元々の不幸体質のせいで武装したスキルアウトや能力者の不良の喧

嘩に頻繁に巻き込まれるため、その経験上ある程度は喧嘩慣れしており打たれ強く体力もそれなりに自信がある。

戦闘スタイルも、右手に宿る力『幻想殺し』で相手の能力を無効にしてから、近接格闘に持ち込んで直接拳を叩きこむ事を基本戦術にしている、この方法で、学園都市のNO.1の実力者を倒したことがある。

しかし、それは相手が能力に頼り切っていて、基礎的な身体能力が低いからだからだ。

つまり、目の前にいる人たちのように、筋肉が凄くて見るからに『強い』人になうわけがない。

武器でもあれば、話が変わるかもしれないが、彼が今持っているものは、菓子が入った袋だけだった。
到底、武器と言える代物ではない。

だから、正直に話して分かってもらうほかなかった。

「ホントかよい?」

「本当ですって!!」

こんないつ殺されるかどうか分からない状態で嘘がつけるわけない

じゃないですか!!

だいたい俺は『覇気』ないし『悪魔の実の能力者』じゃない、普通の『彼女いない歴〓年齢』の高校生ですよ!? 恋愛フラグが一切ない人畜無害な高校生を縛り付けるって、おかしいじゃないですかー!!」

「まあ…嘘を言っているみたいには見えませんが…」

「でも、いきなり現れるっておかしくない?」

「でもここは、『偉大なる航路』グランドラインだから、何があっても不思議でないよな。」

……

「(あれ?なんか今…ものすごい聞き覚えのある単語が…?)」

あの、すみません!!いま、グランドラインって言いましたか?」

「言ったが…それがどうした?」

上条はじいじと一人一人の顔を見直した。

『偉大なる航路』というのは、漫画・ワンピースに出てくる海の名前。

こうしてじいっと見てみると、目の前にいる男たちにも見覚えがある。

…もっとも、名前が分かる人は2・3人だったが。

「ここって、もしかして『白ひげ海賊団』ですか？」
「それを知らずに、乗り込んだのかよい？」

見事なパイナップル頭の男…白ひげ海賊団一番隊隊長のマルコが、答える。

「だから、何回目ですか!？」

俺はマンホールから急降下ダイビングして、気が付いたらここにいたって!!

つーか、異世界トリップか!？なんでワンピースの世界!？不幸だ!!!!」

なんで、こんな死亡フラグが半端なさそうな世界に来てしまったのだろうか。

今までも死にそうになったことが沢山あったが、今回は本当にここで死ぬかもしれない。

「異世界トリップ?よく漫画とかである?」

この船にしては珍しく平均的な体つきの男……隊長格なのは確かだが、上条は名前が思い出せなかった。

「はい!物わかりが良くて嬉しいです!!」

「本当か？胡散臭いな…」

「証拠はあるのか？」

「証拠？」

考え込む上条だったが、証拠なんて思いつかない。
この世界に来ようと思ってきたわけではないのだ。そんな証拠となるようなものなんて持っていない。

「ん？」

「きゃあああああ！！」

頭上から声が降ってきた。上条を囲む人たち（つまり、白ひげ海賊団の隊長たち）が上を向くので、つられて上条も上を向く。

なにかが近づいてくる…見る限り人のようだ。

「なっ！？」

上条の顔が引きつった。

なぜならその人物は……………

「うぐっ！！」

「いたたたた……………」

なんで、この私がマンホールに落ちないといけないのよ……………
？…って…ああ！！あんた！！なんでわ…私の下にいの！？」

女はあわてて上条の上をどいた。

「うう…なんでビリビリまで……………」

これから事態が好転するとは思えない…

「不幸だ……………」

上条当麻は、ビリビリ中学生こと、学園都市のNO. 3…御坂美琴をみてため息をついた。

第3話 何事も口裏合わせが大事

「なんであんたがここにいるの！？っていうか、なんでマンホールから落ちたのに、海の上！？」

「…お前もマンホールからトリップかよ……」

「な…なによ！！」

仕方ないじゃない！黒子の奴が、いきなり飛びついてきたのが悪いのよ！」

「あゝ……それで避けようとしたら落ちたってことか……」

「文句あるわけ！？」

「いや…文句というよりこの状況……なんつーの……不幸だー」

上条は真っ赤な顔で怒ったように話す美琴を見て、ため息をついた。

「不幸だって……ん？」

美琴は周りの状況に気が付いたらしい。

じいーっつと周りにいるオッサン達の顔を見る。

「ねえ…もしかして……ここ……『モビー・ディック号』！？」

「も…モビー…？なにそれ？」

「はああ！？あんた知らないの！？」

バツかじゃない！？っという顔をする美琴。

「いい？『モビー・ディック号』っていうのは、『ワンピース』に出てくる『白ひげ海賊団』の船のことよ。」

頂上決戦の時に燃えちゃったけど、ルフィ達の『ゴーイング・メリー号』や『サウザンド・サニー号』より、はるかに大きくて…はつきり言ってるあのマンガに出てくる船の中で最大級なんじゃ……

……って、どうかしたの？」

「い…いや……よく知ってるな…って…」

ペラペラ漫画知識を披露する美琴に若干引く上条。

学園都市有数のお嬢様学校『常盤台中学』のお嬢様のイメージから、かけはなれていた。

「なによ？こんなの当たり前の知識じゃない？

アンタは読んでないの？」

「いや…少しだけならな。『アバラスタ編』位までなら…」

「『アラバスタ編』ね。」

っていうか、まだそこなの！？もう本誌でルフィは、とっくに19歳になっているって言うのに。」

「あのなあ…」

「おい、なに不吉なことを言っているんだよい？」

見るとマルコが殺気を出していた。

「この船が燃える!?!なに言ってるんだよい!?!」
「……………」

何故か黙り込む美琴。

「おい!!!なんとか言えよい!!!」

「……………」

本当にブ●ーチの●護と同じ声だ!!!」

「はぁ?」

「お願いだから『正解』って叫んでみて!!」

または、『ペガサス●星拳』でも構わないから!!!」

目をキラキラさせる美琴。

「…………おい、御坂…相手が困ってるぞ?」

「えっ?」

「そんなことよりも…ちよつとこっちに来い!」

「えっ!あ…ちよつと!!!」

マルコに『ものまね』をせがむ美琴の腕を引っ張る上条。
そのまま船の端の方まで連れて行った。

「あのなあ……って、なんで赤くなってるの？」

「そ…それはあんたがいきなり………」

「いきなり…なんだ？」

「ああもう!!で、なんなのよ!!」

「実はさあ……ちよつと原作知識を披露するのは止めないか？」

「?なんでよ？」

「いや…だってさあ……気味悪いって思われるだろフツ―？」

だって、誰か不特定多数の人たちが俺たちの知らないところで俺たちの存在や行動を知っているってなんか嫌だろ？」

「そりゃ……そうね。悪かったわ。」

うなだれる美琴。なんか、罪悪感を感じる上条だった。

「ああ…それでさあ、言ったことはもうアレだから、口裏を合わせるぞ？」

「そ…そうね。」

額を合わせて話す上条と美琴。

「おい!!話はずんだのか!？」

さっさと答えろよ!!」

「あ…あはは…悪い悪い。」

作り笑いを浮かべて上条は振り返った。

「俺たちはさっき言ったみたいに『異世界』から来たんだ。」
「で、異世界の奴らがなんで、この船を知ってるの？」

和服を着た人が話しかけてきた。

「じゅ：数年くらい前に、一度この世界にトリップしてきた人がいたみたいなんだよ。」

で、その人が遠くからこの船を見た時に、なんか：

「火柱が上がってたから、燃えたように見えたんだって。『モビー・ディック号は燃えた』って伝わってたのよ。」

「数年前：火柱……ああ……エースの仕業かな？」

「あゝゝゝ：ありえるよい。」

まだ、完全に信用していない眼だったが、納得の色が見え始めた。

「でも、異世界から来たって証明できるのか？」

空島の住人ってことも考えられるだろ？」

「そ：空島？」

原作知識にない言葉が出て戸惑う上条。

「空島っていうのがどういうところか知らないけど、これを見たら

納得してくれる？」

空島を知っている美琴は、上条に合わせて空島を知らないふりをする。そして、ポケットから携帯電話を取り出した。

「これは、携帯電話って言って、いわゆる電電虫みたいなもので、遠くの人と話が出来たり、写真が取れたり、メールが出来たりするの。っていつても、今はアンテナが圏外だから通話もメールも無理だけどね。」

携帯を受け取りいじくる隊長たち。

「たしかに、この世界にはないモノだね。」

「面白いな、異世界人なんて。」

「さすが『偉大なる航路』だぜ!!」

そんな様子を見た上条と美琴は『上手くいった』と目を合わせた。どうやら、信じてくれたみたいである。

「で、どうやって帰るんだ？」

「そ……それが……肝心なところが伝わってなくて……」

このまま、白ひげ海賊団に居候させてもらえれば、衣食住の心配はなくなる。

「そうか……困ったな……早く帰ってもらわないと、危険なのに……」

「危險？」

「そうなんだ。実はこの船……」

今にも処刑されそうな仲間を救出するために、全勢力を集結させてある敵の本拠地に乗り込むところなんだよ。」

しばらく固まる二人……

「なんだか分からないけど、不幸だ!!!!」

「ええええええええ!!!!!(今って頂上戦争の時期なの!?)」

それぞれ違う意味で絶叫する、上条と美琴だった。

第3話 何事も口裏合わせが大事（後書き）

10／18：誤字が発覚したので、一部訂正しました。

第4話 どの世でも許されないことがある

「仲間？ 一体誰が……って、どうしたんだよ、顔色悪いぞ？」

上条は真っ青な顔になった美琴をみて首をかしげた。

「も…もしかして、処刑されるのって…エース…？」

美琴の震える口から紡ぎだされた言葉に一同が驚いた。

「おい、嬢ちゃんは何でエースを知ってるんだ？」

「そ…それは…以前にトリップした人が、エースの母親のルージユさんがエースを出産する場面に立ち会ったから……」

「ってことは、エースの父親の事も知ってるんだな？」

美琴はうなづいた。

「私も手伝う！！ エースを死なせるわけにはいかないわよ！！」

私、こう見えても元の世界でNO.3の実力者なんだから！！」

「おう！ そうなのか！？ 助かるぜ！！」

「でもよ、そういう話は親父にとおさねえと不味いんじゃないかよ
い？」

「確かにそうだな…よし！ 親父の所へ……」

「待て待て待て」

上条が盛り上がっている中に割り込む。

「な…何つーか…話についていけないんだけど…
その…エースって誰？ってか、なんで処刑されそうになったわけ？」

「…あんた…アラバスタまで知ってるんじゃないの？」
「そうだけど…そんな隅から隅まで知ってるわけじゃ…」

はあ………とため息をつく美琴。

「エースっていうのは、麦わらのルフィのお兄さんで、海賊王『ゴールド・D・ロジャー』の息子よ。」

「…ああ…あのメラメラね…ってことは、ルフィの奴も海賊王の息子なのか!？」

「いや…そうじゃないけどね…」

「で、なんで処刑されそうなんだよ？」

「そ…それは………」

美琴はあさっての方向を向いた。

恐らく美琴は、なんでエースが処刑されるのかを知っているのだろうが、先程『あまり原作知識を人前で言わない』と約束していたのと言うことが出来ないのだろう。

「奴の部下の“黒ひげ” ティーチが白ひげ海賊団最大の罪「仲間殺

し」を犯して逃亡したんだよい。だからエースはティーチ討伐に向かったんだよい。

だがよう、負けて海軍に引き渡されたんだよい。

海軍は海賊王の血を完全に断つため、エースの公開処刑を行うことに決めたんだよい。」

マルコが苦々しそうに説明する。

他の隊長たちも顔から怒りがにじみ出ている。

「つまり…裏切り者を倒そうとして返り討ちに合って…ん？じゃあその「黒ひげ」って奴はどうなったんだよ！？」

「ティーチは…エースの首を手土産に『王下七武海』に入りやがったんだ。」

「『王下七武海』？…どっかで聞いたことが…ああ！！思い出した。クロコダイルが入っていたやつか。」

その瞬間、上条の思考が一旦とまった。

『王下七武海』…それは簡単に言うと、政府に略奪を許可された海賊の事だ。

クロコダイルとは、その王下七武海に所属していた海賊で、アラバ

スタ王国の紛争を巻き起こした張本人。秘密犯罪会社「バロックワークス」を密かに立ち上げると、ダンスパウダーを使って、アラバスタ国民の国王への反感を煽るなどして、国の転覆と、国に伝わる古代兵器「プルトン」を手に入れようとした奴だ。

最終的に、政府を凌ぐ軍事国家を築くことが目標だったらしいが、そのために何十…何百もの人の血が流れたかは考えたくもない。それも、自分の配下の血だけではなく、全く関係のない一般人の血がほとんどなのだ。

「…ゆるさねえ……」

上条は拳を握りしめた。

インデックスが見ていたワンピースの再放送に出てきた「王下七武海」のドンキホーテ・ドフラミンゴも脳裏に浮かんた。

彼の真の目的は分からない…だが、人身売買を行っていたのだ。一応は手を引いたらしいが、その理由は「順調過ぎて退屈だった」からだ。

「ゆるさねえ……あんな葉巻鰐や、もふもふピンクの仲間になるためだけに、元々の仲間を殺して……海軍に引き渡したりしたら、公開処刑が待っていることを知っていても……目的のために自分の上

司を海軍に差し出すなんて……」

ぎりぎりつと歯を食いしばる上条。
そして、じつと自分の右手を見た。

「おい、お願いだ!! 俺も仲間に加えてくれ!!
俺がこの右手で、エースを処刑するっていう幻想をぶち壊してやるんだ!!」

どことなく無気力そうだった少年の雰囲気が一気に変化した。

「誰かを絶対に助けたい」という気持ちが全身からにじみ出ていた。

「って! 何すんだよ、ビリビリ!!」

上条はいきなり美琴に後頭部を叩かた。

「あんたって、本当におせっかいよね。」

「そういうお前だって『手伝う』って言ってたじゃないか!!」

「そりゃあ、エースに死んでほしくないからに決まってるじゃない。
アンタより私はエースについて知ってるし。

でも、アンタは、ほとんど今まで知らなかったんでしょ? よく毎回
見知らぬ人のために動けるわね。」

「ほっとけないだろ。仲間を利用するなんて許せないしな。」

美琴はそれを聞くと呆れたように笑った。

「なんだよ？なんか悪いかな？」

「悪くないわよ。あんたらしいって思っただけ。」

感謝しなさいよ。このLV5で学園都市No.3の超電磁砲レールガンの美琴様がアンタの味方なんだからね。このLV.0さん。」

「……馬鹿にしてるのか？」

「し…失礼ね！！！！」

だいたい、私はアンタに一度も勝ったことがないから、ここでアンタより先に救出して、アンタより強いことを証明してやるんだから！！！！」

「証明って…御坂さんのほうがはるかに強いですよー。」

この間の大覇星祭の賭けでも、お前が勝ったじゃないか。」

「そりゃそうだけど…それとこれとは違うの！！！！」

「……痴話げんかはそこまでにして、そろそろ親父のところへ行くよーい。」

マルコの言葉で一気に覚める2人。

……そこで二人は親父…世界最強の海賊・エドワード・ニューゲートと対面し、彼の「息子」と「娘」になる。その時、エース処刑場で……残り約6時間

刻一刻と船は、海軍の待ち受ける「マリンフォード」へ針路を進めていく……。

そして、同時刻……もう1つの物語が動き出していた。

……インペルダウン……

そこは、拷問室と死刑台が立ち並び、世界中で暴れ回っていた凶悪な犯罪者達でひしめき合っている大監獄であり生き地獄。

そこの地下6階「LEVEL 6」“無限地獄”

起こした事件が残虐の度を越えたため、政府により存在をもみ消された終身囚・死刑囚が幽閉されるフロア。超大物や伝説級の危険人物が幽閉されているため、存在は秘匿されている……

しかし、このフロアに似つかわしくない人物が突如、現れた。

「痛ったってミサカはミサカは打ったお尻を触ってみたり。
ってゆーか階段から落ちたはずなのに、なんでこんな所にいるんだ
ろうってミサカはミサカは疑問を口に出してみたり。」

ワンピースを着た外見年齢10歳前後ほどの少女……ラストオーダー打ち止めが現
れたのだった。

第5話 誤解は意外と簡単に生まれやすい

……学園都市第七学区にある病院……

「つてことは、あの子はこの階段から落ちたということだね？」

カエル顔だが、腕は一流と言われている医者……冥土返しが、無表情のまま階段を指差す少女に尋ねた。

ヘウンキャンセラー

「正確に言えば、トイレに行こうと走った結果、足を滑らせてここから落ちてしまった……ということですね、とミサカは説明します。」

「……で、俗に言う『異世界トリップ』というのをしたということね

……」

「そうとしか考えられません、とミサカは断言します。

なぜならミサカネットワークで伝えられた情報によると、検体番号20001号は現在、見知らぬ牢獄らしきところで、ワンピースに登場する『クロコダイル』と会話をしているところですから……

それに『「階段」という場所は異世界へ通じやすい』という情報を手に入れたミサカがいますし……と、ミサカは懇切丁寧に説明します。」

「……漫画の世界にトリップってわけかよ……

で、どうすれば奴は帰って来るんだ？」

学園都市N.O. 1の能力者：で、この病院に入院中の少年、アクセラレ一方通行は先程から無表情で説明をしているクローン人間：リアルサンバー検体番号10032号 ……通称…シスターズ妹達or御坂妹に詰め寄った。

「異世界トリップというのは、何かしらの目的を達成しないと帰ってこれない場合が多いから……」

シスターズ妹達の代わりに同じくこの病院に入院している科学者、芳川 桔梗が答える。

「この場合だと、おそらく『エース救出』をクリアしたら戻ってこられるんじゃないかしら？
ただ…一生帰ってこれない場合もあるから、なんとも言えないけどね。」

「あいつ1人でエースを助けられるとは、考エられねエな。」

「じゃあ、君が助けに言ったらどうかね？」

「あア？」

「幸いにもバッテリーの予備はかなり用意したからね。」

「頂上戦争まで行くようだと、戦いが多いから予備は出来る限りたくさん用意しないと……」

「オイ、芳川！俺はまだ、行くとは言ってねエぞ！！！」

「あら？でも、この状況下で彼女を助ける力があるのは貴方だけよ？
幸いにもミサカネットワークが通じるから、貴方の演算能力も使えると思うし。」

「……っち、くそつたれがア！！」

こうして、最強の能力者は階段でわざと足をふみ外したのだった。

「……おい!! イワちゃん!! 誰か降ってきたぞ!!!!」

新旧七武海のジンベエとクロコダイルを檻から出して、逃走経路を確保した時だった。

ルフィの目の前に突如、何もない空間から1人の少年が落ちてきたのだ。

白い短髪と赤い瞳に中性的な体格をしていて、杖をついていた。そして：白とグレーの縞柄の長袖Tシャツから察するに、囚人ではなさそうだ。

その少年はクロコダイルをまっすぐ睨んだ。

「…オイ。正直に答えろ。ここにガキが来なかったか？」

「ガキ? ああ……アホ毛のガキか?」

「クロコボーイの知りあい？」

「いや…さっき煩いくらい一方的にしゃべりかけてきやがった……
テメエがアレの保護者だったのか？」

「どこにいるんだ？」

「海の上です、とミサカは即座に答えます。」

「!? お前…いつの間に……」

振り返ると先程の妹達シスターズが立っていた。

「おっ!! お前も急に現れたな!!」

「ヴァナアタ…どうやって……」

「冥土返しに言われて来ました、とミサカは答えます。

私ならミサカネットワークで打ち止めの居場所ラストオーダーも分かりますから、
とミサカは面倒なことに巻き込まれたことを恨みつつ、説明をしま
す。」

「それより、海の上ってなんだ？説明しやがれ!!」

「それはワシが走りながら説明しよう。」

ジンベエが前へ出た。

「早くしないとエース君の処刑も、彼女の処刑も止められなくなっ
てしまうのだからな。」

「そうだった!!! 急ごう!!! ……って、彼女も処刑ってどういう
意味だ？」

ルフィがイナズマの作った坂を走りながら問いかける。

「うむ。実はだな……………」

く回想シーンく

「うわぁ！！本物のエースだ！！ってミサカはミサカは興奮してる！！」

『エースはもう来ているって』クロコダイルが言ってたけど本当だったのね、ってミサカはミサカは一瞬疑ったことを心の中で謝ってみたり。てゆうか、本物のエースだよお！！！！」

1人の幼女がピョンピョンと檻の前で跳ねていた。

「エース君の知り合い？」

「いや…………だれだ？」

ラストオーダー

「打ち止めっていうの、助けに来たんだよってっミサカはミサカは胸を張って答えてみる！」

「ラストオーダー？変な名前だな。」

「へ…変な名前って…………これはミサカの意志で命名したのではないから、変って言われたらちよつと悲しいかもって、ミサカはミサカはしょんぼりとうなだれてみたり…………。」

ってか、助けに来たんだよって言ったのに、何の感慨もないわけ？

ってミサカはミサカは疑問を問いかけてみる！」

「…………お前…ミサカって名前なのかラストオーダーって名前なのか、ハッキリしたらどうじゃ？」

「えっとね…………」

ミサカは御坂美琴のDNAマップを元に作られた妹達シスターズが反乱や暴走をした時に備えてつくられた上位固体で、他の個体に対する制御や命令権を持つミサカネットワークの管理者なの。

だから、口癖で一人称が「ミサカ」なんだよってミサカはミサカは説明してみるけど、理解できる？」

「いや、さっぱり分からねえ。

っていうか、さっさと逃げやがれ！！あぶねえぞ！！」

エースが声を張り上げるが、少女は動こうとしなかった。

「だって…………見殺しには出来ないよってミサカはミサカは真剣に答えてみる。」

その瞳は言葉通り真剣そのものだった。まっすぐエースをみつめている。

「ミサカは単価18万円…つまりこの世界に換算すると18万ベリ1で製造可能のクローンで、20000体の妹達シスターズの総称の事なのってミサカはミサカは妹達のせつめいから始めてみたり。

で、妹達は「絶対能力進化（レベル6シフト）実験」で1号から1

0031号まで殺されたんだけど、それまでは計画のためだからって特に何も思わなかったの、ってミサカはミサカは告白してみる。たしかにミサカ単体が破壊されたときには、全ミサカをつなぐ脳波リンクからその個体の存在が消されるけれど、ミサカの最後の一体が死ぬまで破壊されたミサカの記憶や情報自体が消えるわけではないから、実験にはなんの損傷もないわけ。

でもね……ミサカ単体が死ぬことに涙を流す人がいるんだってことをミサカは知ったの。だから、これ以上は誰一人として死ぬわけにはいかないってミサカはミサカは宣言してみる!!」

「……なんか難しい話でよくわからないんだが……」

「つまりね……人造物のミサカ単体のために涙を流す人がいるんだから、貴方だって死んだら涙を流す人がいるはず、だから死ぬのは良くないってミサカはミサカは説得を試みる。」

そういうと、打ち止めは優しい姉のように微笑んだ。
エースは何も言えなくなった。

「お前……」

「そこで何をやっている!!!」

その時厳しい声がとんだ。

打ち止めの後ろには、いつの間にか監獄長のマゼランをはじめとする監獄職員が立っていた。

「お前……」

「うひゃあ!! ちょっと不味い状況下もってミサカはミサカは恐怖でわなわな震える身体を押さえられなかったり…」

「この男を助けに来たのか？」

マゼランが問うと、打ち止めはガクガクしながらうなずいた。

「ラストオーダー!! 逃げろ!!」

エースが力の限り叫ぶ……が……

「こ…腰が抜けて動けないみたい…ってミサカはミサカは現状報告をしてみる…」

顔が引きつっている打ち止め……

それを見たマゼランは……

(これはなんだ?)

現状把握に苦しんでいた。

服装や健康状態からさっするに、どう見たって外部の人間だ。しかも幼女…

侵入者の” 麦わらのルフィ”と一緒に侵入したとも考えられるが、この幼女はなんでこの最下層のフロアにたどり着くまで、監視の目に留まらなかったのか……そもそも、なんでこの幼女はエースを救出に来たのか……

「おい、これもエースと共に連れて行くぞ。」

「えっ？」

マゼランについてきていた女職員は、急なことでイマイチよく分かっていなかった。

「しかし…拷問の上で監獄へはおりこめばいいのでは？」

「”火拳のエース”を助けに、誰にも知られぬようにココまで来たコレがただモノに見えるか？

恐らくこれは……

エースの実妹だ。

先程の会話の中にも、よく理解できなかったが「妹」という言葉が出てきたしな。

そうでなかったとしても、海賊を助けに向かったものへの見せしめともなる。

いずれにしろ、本部へ送った方が身元も早く割れるだろうしな。

……連れて行け。」

〽回想シーン終了〽

「……クソ餓鬼がア……」

話を聞き終えた一方通行は、呆れと怒りがごちゃ混ぜになった声を出した。
アクセラレータ

「…麦わら。俺も仲間に入れやがれエ。オツと勘違いすンじゃねエぞ？俺はアノ餓鬼を取り戻しに行くだけで、お前の兄貴なんて知ったこっちゃねエ。」

ただ、目的地が同じだから手を貸してやるってことだ。」

「…いいぞ。ってか、お前の能力ってなんなんだ？」

「……気が付かねエのか？俺が今、どうやって動いてインのかをなア？」

そう…今、一方通行は、少し浮くようにして走っていた…否、走っているのではない。滑っていたと表記した方が正しいだろう。

「アルビダみたいな感じで『摩擦』をなくしてるのか？」

「摩擦ウ？違エな。」

これは反射…正確に言えば『ベクトルの向きの変換』だア。

そーいやア…自己紹介がまだだったなア…………

俺は学園都市最強のLV5の超能力者…「アクセラレータ一方通行」だア!!」

白い髪に赤い目の少年はニタリと笑った。

第6話 彼を止める者は誰もいない

……海の上……

鳥の声1つしかない……聞こえるのは処刑台のある町へ近づいていく船の音のみ……

「悪いな。せっかく助けに来てくれたのにこのざまだ……」

もう二度と見上げることはないだろう空を見つめたままエースは隣にいる幼女「ラストオーダー打ち止め」に話しかけた。

「確かにミサカは貴方を助けられなかったけど……ミサカは全然不安じゃないよってミサカはミサカは自分の感情をあらわしてみる。」

「なんで不安じゃないんだ？」

「だって……あの人が助けに来てくれるから……貴方の弟と一緒にミサカ達を助けに来てくれるってミサカはミサカはミサカネットワークを通じて分かった喜びをあなたに伝えてみる!!」

確かに打ち止めの声色には全く「死の恐怖」を感じさせないモノだった。

監獄で出会ったとき同様明るくて、楽しげな感じで話していた。

「ところで……ってミサカは話題を変えるけど……いい？ってミサカは

ミサカは許可をとってみたい」

「?なんだ?」

「えっとね……………」

『悟飯!!』って言って欲しいの!!ってミサカはミサカは懇願して
みる!!

出来なかったら『魔貫光殺砲』でも構わないかも!ってミサカはミ
サカは……………」

「待て待て待て!!!!」

今が護送中だということを忘れてツッコむエース。

「何を言わせたいんだ!?ってかどういう意味なんだそれ!」

「だって…………エースの声優さんとピッコロの声優さんは同じだから
…生エースの声が聞けたから、ついでにピッコロさんの声も聞きた
いかもってミサカはミサカは密かな願望を打ち上げてみたり!!」

「せ…声優ってなんだよ!それ以前に、ピッコロって何者だ!」

「えっとね…………ナメック星人だよってミサカはミサカはエースに教
えてあげることにする!!」

「人間じゃないのか!?そのピッコロって!!」

「人間のわけないよ、肌が緑色で触覚生えてるし…………でも、カッコ
イイんだよってミサカはミサカはピッコロさんのことを述べてみる
!!」

「……………」

「ねえねえ!!…いってみてよお…ってミサカはミサカは目をキラ
キラさせながら懇願してみる!!」

「……………ま…『魔貫光殺砲』……………」

「だめ！！もっと低い声で！！ってミサカはミサカは注文を出して
みる！！」

あと、これはピッコロさんの必殺技の一つだから、もっとテンション
上げて言っただけいいかもってミサカはミサカは追加注文してみた
り！！！！」

「……………」

「ほらほら早くくくくってミサカはミサカは足をバタバタさせなが
ら懇願してみる！！」

「……………」
『まかんじつぞう魔貫光殺砲』！！！！！！」

「うわあ！！本物そっくりってミサカはミサカは感動してみたり！
！！」

（緊張感ねえなあ……………）

真っ赤な顔をしながらも、ピッコロをはじめとする古川さんの物ま
ねをするエースと、それにはしゃぐ打ち止めを見て、ため息を隠せ
ない護送警護中の中将を含む海兵たちだった……

（Level 5 ↓ Level 4 への階段付近）

そこを走り抜ける4つの人影があった。

「処刑ってのは、いつ始まりやがんだ!？」

「今が約10時前：処刑は午後の3時!!」

その時刻には必ず処刑は実行される!!!

白ひげのオヤジが来るとするのならその何時間も前にしかけるハズ。

エースさんはもう海の上!!!

戦いはいつ始まってもおかしくない!!!」

「3時まで殺されることはないんだな!! ならまだ間に合う!」

「フン……………」

クロコダイルが列から抜き出ると、扉の前に躍り出た。

「扉なんざ無意味：

この右手は渴きを与える。」

彼が右手を当てると、扉が砂になって消えていく……

そう、彼はスナスナの実の能力者で、大ざっぱにいうと、右の手のひらはあらゆるものの水分を吸収し、砂へと変えることができるのだ。。

扉の向こうには大量の獄卒が待ち構えていた。

「こちらLevel 4!!!」

囚人「ジンベエ」「クロコダイル」侵入者「モンキー・D・ルフィ」
それから見覚えのない少年が現れました!!!! 応戦します!!!!

撃て!!!!!!」

しかし、銃弾など砂人間のクロコダイルには無意味。

「三日月形砂丘!!!」
バルハン

獄卒を砂にするクロコダイル。その一方で…

「撃て!! 監獄弾だ!!!」

「ゴムゴムのお……」

ルフィはそれを交わすと彼らの頭上に飛び上がり……

「雨!!!!!!」

回転状態で放つゴムゴムの銃乱打する。

「魚人空手 唐草瓦正拳」

ジンベエも正拳突きのような形を行った後、全方位360°に衝撃

波を発生させて、獄卒たちを吹っ飛ばす。

「うわぁ！！勝てるわけがねぇ！！……ん？おい、あの餓鬼はどうした！？」

見覚えのない少年の姿が見当たらなかった。

この戦いのさなか巻き込まれて死んだか？とその獄卒が思った時だった。

その少年はいた。平然とLEVEL 3 へ続く階段に向かって歩いてくる。彼はかすり傷一つ負わないで平然と笑っていた。

「撃て！！あの少年も麦わらたちの仲間だ！！」

「ア……めんどくせえなア……」

弾丸は彼に当たらずに、すべてが反射される……いや、正確な反射ではない。

そのすべてが的確に監獄弾を撃っていない獄卒にまであたるのだ。

一方通行はベクトルの向きの変換をして、銃弾をすべて監獄弾を持つていない獄卒に当てていたのだ。

が、もちろんそんなこと理解できる獄卒たちではない。

「どうしたア！？その程度かア！？」

その程度じゃアこの一方通行様は止まらねエぜ？
ってか、このままじゃア、てめエらは自滅だぜ？」

「か…構わん!!!撃て!!!数で何とか抑えろ!!!」

構わず撃ってくる（ばかな）獄卒たち。

「はっ!!!馬鹿だなァ!!!」

迷わず”向きの変換”をする一方通行。

その変換は極めて効果的な変換で、次々と監獄弾を持っていない獄卒のみ殺されていった。

「報告します!!!!」

無線を使う獄卒。

「謎の能力者が現れました!!!銃が効かず、ただの反射ではなく…その向きまでコントロール…うわああ!!!」

「勝手に情報与えてンじゃねェの!!!」

弾丸をものともせず…かといって槍を振りかざしてくる獄卒も近づくだけで吹っ飛ばされ……

まだルフィ達が後ろで戦っているのを感じながら先へと進む。

「貴様!!!何者だ!!!どこ出身だ!?!」

「聞きてェのかァ?」

俺は……^{アクセラレータ}一方通行。地獄の土産に知っておくんだな!!」

学園都市最強の彼を止められるものは誰もいない。

彼は誰よりも早く、LEVEL 3へと続く階段を上り始めた。

第7話 助けられるものは助けるに越したことはない

「おい!! 所謂いえば、アクセラレータの姿がみえねえぞ!!」

はあはあと荒い息をつきながらルフィは周りを見わたした。

ブルゴリの軍団や獄卒たちばかりで、特徴的な白髪のやせた少年が見当たらない。

「彼なら絶対に無事です、とミサカは断言します。」

軍用ゴーグルを装着し銃器を構える少女が言った。

「大丈夫って…何を根拠に言っているツチャブル?」

オカマ王イワンコフも言うが、少女は無表情のままだった。

「問題ありません。一方通行は現在予備のチョーカーをいくつも持っていますし、それに彼は学園都市最強の能力者で、一万体弱のミサカを無傷で殺した張本人ですから、とミサカはこいつらの頭じゃ分からないだろうと思いつつ説明します。」

「よくわかんねーけど、能力者なら心配いらねえな!

それより、出口はどこだ!？」

ルフィがLEVEL 4 の出口を探しているとき、すでに一方通

行はLEVEL 2 まで来ていた。

つい先ほどまでこのフロアには監獄長のマゼランがいたのだが、LEVEL 4 へ向かう大型リフトに乗り込んだところだったので、このフロアには毒の壁対策を考えているバギーとゆかいな仲間たちしかない……

が、そんなことは最強の能力者には関係ない。

「な……なんだお前!？」

「脱獄者には見えないんだカネ!!」

とかごちゃごちゃ言う奴らには見向きもせず、ただ毒の壁をじいつと見た。

「……毒か……めんどくせエ……」

チョーカーの電源を入れ直すと、毒の壁に手を伸ばす。

「おい!! あぶねえぞ!!」 「自殺行為だ!!」

「うっせエなア……」

彼が毒の壁に触れるや否、彼の能力によって毒の壁は反射され、向こう側へと吹き飛んだ。

毒が消し飛んだのが分かると、チョーカーの電源をいったん切る。

「おお!! すげえ!!」

「LEVEL 1 への道が開いたぜ!!……って……」

壁の向こう側に立っていたのは……黒いひげを生やしたデカイ男が率いる謎の集団だった。

「ゼハハハハ！！面白い能力だな、小僧！！」

「……………」

「どうだ？俺の仲間になんねえか！？」

「…くだらねエ……俺は自分の目的を果たすだけだ。」

ここで上条当麻や御坂美琴、おそらく打ち止めやその他、異世界トリップした一般人だったら目の前の男”黒ひげ”に敵意や悪意・憎悪といった感情が沸々と湧き出てくるだろう………が、彼は違った。

彼はエースの処刑なんて知った事ではない。

海軍にも海賊にも興味がない。

物語の主人公・ルフィが今、ハンニバルと戦ってこの後すぐ、マゼランとまた戦うなんて知った事ではない。

彼の目的はただ一つ……あの少女…「ラストオーダー打ち止め」を助け出すこと……
そのためだけに動いていた。

（確か…この世界の移動手段は『船』だったんだよなア……となると軍艦を奪うしかねエか
つか、なりゆきで『協力する』ことになったアイツらが全然現れる気配しねエ……）

後ろを振り返るが、囚人たちを開放しながらはしゃぎまくるバギーたちしかない。

……どうやら一人で軍艦を調達しなければならぬみたいだ。

外へ出ると、マゼランの命令で船が今まさに海へ乗り出そうとして
いるところだった。

「どれにしようかなア」

一方通行はニタリと笑みを浮かべると、チョーカーの電源を再びON
にした。

「一人で残る気ですか、とミサカは心の中を見破ってみます。」

ミサカは包帯グルグル巻きでクルクル回っている男……いや、オカマ
のMr. 2 ボン・クレーに問いかけた。

彼は一方通行が手に入れた船にまだ、乗っていなかった。

……ジンベエ達やバギー一行がこの場所に着いたとき、10隻あつ
た船のうち、この船を残し、他の船は人の屍を乗せたオンボロ幽霊
船とかしていた。

ルフィが着次第、いつでも出航できる……それなのに、ボン・クレ
ーだけが乗船していなかった。

「誰かが残って『正義の門』を開けないといけないのよ。
あっしが一番確実にできる!!」

『正義の門』……インペルダウンを取り囲む門……これは内側から
開けないと開かない……

「確かに成功確率は99%です、とミサカは分析結果をいいます。ですが、そのあとはどうするつもりなのか、とミサカはそのあとに待っている運命が分かっているのか聞いてみます。」

「それ聞くのヤボじゃナイ？」

苦笑するボン・クレー……ミサカは無表情のままだった。

「私の方が安全かつ正確に開けることができます、とミサカは宣言します。」

「あんたね……分かってるの!？」

あの門を開けるにはここに残る……つまり、誰かが犠牲にならないといけないってことなのよ!!

アンタは脱獄囚ですらないじゃナイの!!」

「……確かにそうですが……」

ですが、ミサカ的能力を駆使すれば船の上からでも開けることができます、とミサカは断定します。」

ボン・クレーの顔に驚愕が走った。

「ええ!! あなた、能力者だったの!!」

「ええ。ミサカは……」

「おい!! みんないるか!!」

「麦ちゃんのこえ!!」

ボン・クレーが振り返ると…………

「逃げるぞ！！軍艦はあるかっー！！！！」

こちらに向かって走ってくるルフィ達がいた。

…………猛毒を滴らせる監獄長のマゼランを連れて……

「「「なんかすごい連れてる！！！！」」」

「確かに連れていますが…原作とは違い、こちらには船があります。だから少しは動揺が少ないようですね、とミサカは分析をします。」

「原作？」

「あなたには関係ありません、とミサカは断言します。では、私達も乗船しましょう。」

ボン・クレーやミサカ、ルフィ達も乗り込み、マゼランにやられたはずのイワンコフも『地獄ウインク』で地上に戻ることができ、船は出航した。

「いったいこれはどういうことだ……」

残っている船が全船、使えない状態になっていた。

「一体どういことだ！！」

微かに息のある獄卒に尋ねる。

「はぁ…はぁ……白髪が悪魔が……赤い目をした痩せた少年が……
たったひとりで……」

「たった一人!？」

「は…はい……攻撃を全て跳ね返し……何をしても歯が立たず……」

そんな囚人…聞いたこともない……驚愕を隠せないマゼランだったが、ここは冷静になるように努めた。

「まあいい…正義の門が開けられることはない。

奴らはあのままあそこで立ち往生をし、逃げることは出来ない。対策はゆっくり考えれば……」

マゼランは己の目が信じられなくなった。

正義の門が…開き始めている……

マゼランは動力室に走った。

「はぁ…はぁ…動力室!!何をしている!!!!」

「そ…それが…何者かにハッキングされたらしく!!
こちらからのコントロールが出来ません!!!!」

「なんだと！！！」

「……うまくいったのはミサカのお蔭ですね、とミサカは原作を変えたことを自慢してみます。」

「……この手があったとはなァ：そーいや、てめェも能力者だったな。」

弱すぎるから忘れてたぜ。」

「……一応これでもレベルは2〜3なんですよ、とミサカはショットクを少しうけたのでうなだれます。」

ミサカ：シスターズ妹達の能力はレベル2〜3程度の発電能力『レディオノイズ欠陥電気』。
本物の御坂美琴の『オリジナル超電磁砲』には二万體全員でかかっても齒が立たないとされているが、ハッキングなんてお手の物だった。

「でも……少しは人のためになれてよかったです、とミサカは安堵します。」

ルフィ達と笑っているボン・クレーを見たミサカ。

……本来なら彼が開けていた正義の門……

原作にはない仲間を加え、ルフィの奪った軍艦は…処刑の行われる

街、マリンフォーフォードへとタライ海流に流され進んでいく……

第8話 父親ってろくでなしに見えることが多い

「うわぁ………すげえな………」

ぐると360度どこを見ても水・水・水……まるで水中トンネルを思わせるところだが、水中トンネルの中ではなく、上条当麻は海の中にいた………しかも乗船している船ごと……。

上条は妙な事に気が付いた。

海の中にいるのになにも生物の気配がしない……

ONE PIECEの世界なんだから人魚や魚人がいてもおかしくないのに、魚一匹すら見かけなかった。

海の生物たちは、これから起こることを予測しているのだろうか？
そう考えると少し気味が悪くなってきた。

「ちょっと………聞いているの……！」

ビリビリっと前髪に青白い電気を走らせる美琴がバシィっと上条の頭を叩いた。

「いてっ！聞いてますとも……！」

ただどういう技術で海の中を船が進んでいるのか、気になったただけだって……！」

「………そっか、アンタの知識はまだシャボンディまでいってないの

よね……

いいわ！！この美琴様が教えて上げる！！」

美琴が得意そうに腕を組む。

「見て分かると思うけど、船の周りをシャボン玉で覆うのよ。これをコーティングっていうの。」

えっと……たしか、船全体をヤルキマン・マングローブのシャボンで包みこむことで海中航海を可能にするの。これは深海1万mの水圧にも耐える事が可能で、多少の穴が開いたくらいでは影響はないんだけど、海王類などに噛まれて多数の穴が開けば潰れるのよ。」

「へえ……学園都市も真っ青な技術だな。」

「そういうこと。」

で、話を戻すけど……アンタは何をするのか分かった？」

美琴が話を”作戦”の方に戻した。

作戦とはもちろん、エースをいかに被害最小限で救い出すかという作戦だ。

原作を知らない上条は美琴にまかせっきりだったのだが……

「でもさ、これって俺、あんまり必要なくない？
ってかさあ、俺、いらなんじゃない？」

作戦内容を聞いた上条がツッコむ。

「だって、アンタの能力は確かに凄いけど、敵さんは能力＋体力＋腕力…ついでに脚力もあるの。

能力者だからって一方通行やアタシみたいな能力に頼り切っている奴は少ないの。

ほら、例えばエースだって、能力者だからそれに頼り切ればいいのに、筋肉が凄いでしょ？だから、仮にアンタの力で能力を消したところで気休めにしかないのよ。」

「……ってことで、俺はこんな役回りしかできねえってのか……

なんかやるぞ！！って盛り上がったのに……不幸だ……」

がつくし…と肩を落とす上条…

「まあ、気になさるなって！！これも重要な仕事よ!？」

美琴が上条の肩を笑いながら叩く。

「うう…中学生に慰められる高校生って……

ってか、前もこんなこと感じたような気が……」

上条の憂鬱に関係なく…白ひげ海賊団はマリンフォードへ進んでいく……

海軍本部のある島” マリンフォード”

ここにはおもに海兵の家族が暮らす大きな町がある。

現在、住人達には避難勧告が出ており……

避難先のシャボンディ諸島からモニターによって…人々は公開処刑の様子を見守っていた。

各所から集まった記者やカメラマンたちもまた

ここから世界へ情報をいち早く伝えるために身構えていた。

海軍から出される監視船は出航の度に撃沈され、”白ひげ”の情報も皆無……

マリンフォードに集まる緊張は高まるばかりで

せまる処刑の時間までとうとう3時間をきっていた。

ここには世界各地より集められた名のある海兵たち総勢約10万人の精銳がにじり寄る決戦の刻を待っている……

三日月形の湾頭及び島全体を50隻の軍艦が取り囲み、湾岸には無数の大砲が立ち並ぶ……

港から見える軍隊の最前列に構えるのは、戦局のカギを決める曲者たち

海賊”王下七武海”

そして広場の最後尾に高くそびえる処刑台には事件の中心人物

白ひげ海賊団二番隊隊長”ポートガス・D・エース”が運命の刻を待つ……

その眼下で処刑台を固く守るのは、海軍本部最高戦力

3人の”海軍大将”

今考えうる限りの正義の力が、白ひげ海賊団を待ち構える……

が、そこにイレギュラーが混ざっていた。

「……おい！エースの横にもう一人……誰かいるぞ？」

「本当だ！ってかアレ……子供じゃないか？」

「エースとどういった関係だ！？」

ざわざわと報告とは違う事態に周囲と話す海兵たち……だったが、処刑台に海軍大将・仏のセンゴクが現れたことで水をうったかのように、シーン……となった。

アフロヘアーと口ひげが特徴で、実物大のカモメのオブジェを載せた軍帽と黒縁の丸眼鏡を着用している男……それが海軍元帥・センゴク……。

センゴクが手のひらに載せている電伝虫を使おうと口を開いたそのとき……！

「うわぁ……！あそこにスモーカーがいる……！ってミサカはミサカは原作キャラに指をさしてみたり……！っていうか、手錠されているから本当は指をさしていないんだけど、心の中では指しているからそれでいいか、ってミサカはミサカは自分で納得してみたり……！」

……エースの横で手錠につながれていた打ち止めが声^{ラストオーダー}を上げた。

シーンと静まり返った中だったので、彼女の甲高い声は島全体に響

き渡っていた……
もちろん、シャボンディ諸島のモニターを通じて、シャボンディ諸島にも……

「…スモーカーさん……知り合いですか？」

彼の部下で眼鏡の女剣士・たしぎ少尉が尋ねた。

「いや…しらねエ…だれだあれ？」

常に2つの葉巻を吸っているほどのヘビースモーカーで、自然系悪魔の実・モクモクの実の能力者・白狼のスモーカー准将は少し眉間にシワを寄せた。

あんな小娘みたことがない。なのになぜかものすごく馴れ馴れしい……
……
忘れているだけかとも思ったが、全く記憶にない……。

「ねえねえ、結局”けむりん”って誰と付き合っているの？ってミサカはミサカは長年の疑問をズバリ聞いてみたり!!」

「てめえ!! 何を分わけわかんねエこと言ってるんだ!？」
「ってか、そのあだ名は止めろ!!」

「ええ!?! なんで? ってミサカはミサカは抗議の色をあらわしてみたり!!」

ってというか、質問に答えてほしいんだけど、ってミサカはミサカは

口をタコのように膨らませてみる！

ねえ、誰？たしぎ？それともヒナ嬢？どっちってミサカはミサカは二択にしてみる！」

「どっちでもねえ……！！」

一体そのガキは何者なんですか……！！」

スモーカーはセンゴクにむかって声を張り上げる。

「分かった。今から説明しよう。」

センゴクは、実は自分も気になっていた事柄だったのに話題を変えられ、少し機嫌が悪かったが、気を取り直すところにした。

……で、話が始まったのだが……若干2人……怒りに燃えてセンゴクの話など耳に入らない男たちがいた……

「ゆるさねえ……アイツもヒナ嬢を狙っていたのか……！！」

「愛しのヒナ嬢はこのフルボデイのものなのだ。だれにも渡すものか！」

海軍大佐・黒檻のヒナの部下で雑用要員のジャンゴとフルボデイが沸々とライバル出現の怒りに燃えていた……

が、そんなことはどうでもいいので、さっさとセンゴクの話に戻すことにしよう。

「…エース…お前の父親の名前を言ってみろ。」

「…俺の親父は…白ひげだ!!」

苦悶の表情の後、エースは絞り出すように答えた。

「違う!!!」

「違わねェ!!!他にいねェ!!!」

「……南の海にバテリラという島がある……」

母親の名前はポートガス・D・ルージュ……

この女は我々の頭にある常識を覆し…我が子を思う一心で海軍の目を欺くために、20か月もの間エースを胎内に宿し続けた……」

センゴクの重々しい口からエースの出生の秘密が語られていく……

「そしてお前を生むと同時に力尽き果て死んだ。」

父親の死から一年と三か月を経て……世界最大の悪の血を引いて生まれてきた子供…それがお前だ。」

打ち止めが現れた時以上にざわつく海兵たち。

エースが唇を噛みしめ下を向き続ける…

「お前の父親は海賊王”ゴールド・ロジャー”だ!!!!!!」

「……………!!!!!!?」

周囲に今日最大のざわめきが走った。

シャボンディにいる記者の中には手帳を落とす者までいた。

「い…生きていたのか…海賊王の血が…」

「じゃ…じゃああの女の子は？」

「白獺の知り合いか？それがなんで処刑？」

「この少女…ラストオーダーは誰にも見つからずに地獄の監獄・インペルダウンに侵入に、エースの元へとたどり着いた……まあそこでとらえたわけだが……」

インペルダウンの職員が言うには、彼女は”エースの親族”らしい…」

正確にはインペルダウン職員は”妹”と伝えられたのだが、伝言ゲームに例えると分かりやすいと思うが、最初は”妹”と伝わってきっていたのに、いつのまにか”親族”に変わり……そのままセンゴクの耳に入ったのだった。

「それもただの親族ではない…

お前がいつ生まれたか言え。」

「言っても分からないと思うけど…

ミサカは元々筋ジストロフィーの治療という題目で御坂美琴が提供したDNAマップを元に作り出されたレベル5の「超電磁砲^{レベルガン}」の量産を目指す「量産能力者計画^{レディオノイズ}」の上位固体で、薬を投与したりして成長を速めたから、こう見えて実は生まれてから1年もたってなかったり、ってミサカはミサカは自分の出生について語ってみる。」

「……つまり、少し頭がおかしい子だ。」

「おかしいって女性に対して失礼かもって、ミサカはミサカは地団太をふんでみたり!!!」

「つまり、こうして複雑な嘘までついて必死に素性を隠そうとしている……

そこまでして隠す必要がどこにある？

ちなみにルージューにもロジャーにも兄弟はいない。

彼らの両親も彼らが幼い時に他界しており、彼らにも兄弟はいない…

なのに”親族”と名乗る少女……

そう…つまり、エースの実子!!!!」

「……!!!!!!」?

さらなるざわめきが沸き起こった。

「ガープ…本当かい？」

一応エースの育て親…海軍中将ガープに、同じく中将の紅一点…にしては歳を召されているツルが尋ねた。

「いや、知らん。馬鹿者が…」

あんな可愛い娘を作ったならなぜワシに報告せん!!」

「ちげえよ、ジジィ!!!!!!」

ガープの声を聴いたエースが声を張り上げた。

「嘘はいかんぞ、エース!!」
「いったいいつ作ったのじゃ!! いや、そもそもその子の母親はどうした!？」

「母親も何も俺の子じゃねエ!!!!」

「”白ひげ”の所の女か? ナースか?」

「だから!! 聞けって! 俺は……………」

「センゴク元帥!! 報告します!!」

「!？」

いきなり声を上げた海兵…ものすごく必死な顔をして敬礼をしてい

た。

なんか涙が出かかっていた。

「せ：『正義の門』が誰の指示もないのに開いています！
動力室とは連絡が取れず：」

「なんだと！？」

見てみると、確かに開いている……

エースもガープも言い争いをやめてしまった。

「来たぞおー！ー！！全員戦闘態勢！！」

「突如現れたぞ、一体どこから！！！！」

ゴゴゴー！と音を立てながら徐々に近づいてくる船：
それも一隻に二隻ではない。

個性それぞれの色を持つ大艦隊だった。

海軍は大慌てだった。

「海賊船の大艦隊だあ！！」

”白ひげ”はどこだ！？確認しろ！！」

”遊騎士ドーマ””雷卿マクガイ””ディカルバン兄弟”……大
渦蜘蛛スクアード”……………！！！！

総勢43隻……”白ひげ”と隊長たちの姿がありません！！

しかし間違いなく傘下の海賊たちです!!!!」

「……………」

……………お前らまで!!!!!!」

いつの間にかエースは小刻みに震えていた。

センゴクを含む海兵たちは”白ひげ”がいないことに氣をとられていて、そのことに気づいていなかったが、打ち止めは氣が付いていた。

「ほらね、みんなエースが死んじゃうの嫌なんだよってミサカはミサカはニコツて笑いかけてみる。」

そういつてエースに微笑むミサカ。

「親父さんはちゃんと来るよ、ほら! もうそこまで来てるってミサカはミサカはネタバレを試してみたり!」

「!?!? どこにいるんだ!?!?」

「よくよく耳をすましてってミサカはミサカは助言を試してみたり!」
「?」

エースはじつと耳をすました……………聞こえるのは海兵の声と傘下の海賊の声……
その時だった。

ゴボボ……ゴボボ……

耳にとらえるは泡の音……

「まさか!!」

そのことにセンゴクをはじめとする何人かの海兵が気づき始めた。

「えっ! この音……どこから?」

ゴボボ……ゴボボボ……

一般海兵たちに聞こえるくらい大きくなってきた泡の音……

「…………こりゃあ、とんでもねえ場所に現れはしねえか?」

「布陣を間違えたかねェ」

みるみる間に三日月形の湾内に四つの巨大な影が浮かび上がった。き

「湾内に海底に影が!!」

「まさか……」

そうだったのか、あいつら全船……!!

コーティング船で海底を進んでたのか!!」

驚きの色を隠せないセンゴク……

ザッパアアン!!!!!!

突如、巨大な白い鯨型の海賊船が湾内に姿をあらわした!

「”モビー・ディック号”が来た!!!!」

「次いで3隻の白ひげ海賊団の船!!!!」

新たに現れた3隻の船はモビー・ディックより少し小柄な黒鯨型の船だったが、巨大であることには変わらない。

「湾内に侵入されました!! 14人の隊長もいます!!!!」

「”白ひげ”……」

恨みのこもったまなざしをむけるセンゴク……

「グララララ……何十年ぶりだ？ センゴク……」

カツン…カツン…とモビー・ディック号…白鯨をかたどったの頭部
に向かって進む足音が響く…

「俺の愛する息子は無事なんだろうな……！！！！」

三日月のような白ひげを蓄えた、地肌に直接コートをマントのよう
に羽織っている、常人の数倍はある体躯の筋骨隆々の大男……”白
ひげ”こと……”エドワード・ニューゲート”が姿を現した。

「グララララ……」

ちよつと待ってろ…エース！！！！」

なんで来たんだよ……おれなんかほっておいてもいいのに……

「オヤジイイイ！！！！！！」

エースは力いっぱい叫んだ。

第9話 誤解は誤解を生む

「…まさかこれほど急接近されるとは…」

グララララッと笑う男を見て苦々しげにつぶやく海軍元帥・セングク…

先程までの空気と一変。辺りは緊張という文字が支配していた。

…それは無理もないことかもしれない…

かつて海賊王ロジャーと唯一互角に渡り合った、大海賊時代の頂点に君臨する「世界最強の男」。「ひとつなぎの大秘宝」^{ワンピース}に最も近い存在とされ、その伝説的・怪物的な雷名は世界中に轟いている男…それが目の前に突然現れたのだから…

「…」 白ひげ” ってどんな技を使うんですか？」

1人の海兵が隣にいる先輩海兵に尋ねた。

「ば…バカ！お前知らないのか！？」

「え…？」

「よく見ているよ…こんな戦い滅多にない…」

アレは…世界を滅ぼす力を持っているんだ…」

「世界を…滅ぼす？」

なんだかスケールがデカイ話だ…

確かに今、何か力をためるように腕をクロスさせているあの男からは威圧感を感じる…：が、威圧感で言えば七武海やセンゴク元帥…青キジをはじめとする3人の大将達からも威圧感を感じる…：彼ら全員の力を合わせれば楽々あんな爺さん倒せるんじゃないか？

恐れることはない…と思う。あんな爺さん…俺たちの正義に勝てるはずはない！

先輩海兵達はビクビクしていて唾を飲みこんでいる…：が、俺はあんな爺さんには負けない。

でも…：

”白ひげ”がニヤリと笑みを浮かべ、クロスさせていた両腕をほどいて、まるで壁に叩きつけるように空気を一気に叩いたとき…：俺はその考えが甘いことに気が付いた…：

”白ひげ”の叩いた空気にビシビシッとひびが入る。

そして波が…海が…グググッと持ち上がり、それにつられて俺たちのいる陸地もぐらりと持ち上がったのだ！

…：すぐにそれは収まったが…：こんなことで終わるわけがない…：

ふいに安全なところにいる家族の顔が浮かんだ…：

…俺は…帰れないかもしれない……

俺は首を振って、そんな不吉な想像を消し飛ばそうとした。

ここには海軍が誇る最強勢力がいるのだ……中将だって全員集まっている……

俺は…安全だ。

絶対に…生き残ってやる！俺はそう誓った。

「うう…今のがさっき言ってた”海震”って奴か？」

「そう。親父さんは”グラグラの実”の能力者で空間を殴りつけ大気にヒビを入れることで震動を起こす事が出来る地震人間なの！超人系悪魔の実の中では最強よ。」

「最強…か…」

上条当麻は美琴の説明を聞いて納得した。

地震は”津波”を呼び起こす……それは舞台のほとんどが”海”というこの世界にとって恐怖となるからだ。

津波の対処策は”とにかく高台へ逃げる”こと……だが、船に乗っていて津波が突如来たら…逃げられない……

ってか、まずここにも高台ないし……俺たち…無事だよな？いくらなんでも”自滅”はないよな？

「…ところで…御坂。エースの隣に座ってるのって…妹達シスターズに見えるんだけど、何者なんだ？」

「へっ!?!」

頓狂な声を上げた美琴は、じいっと目を細めてエースのいる処刑台を見た。

状況が理解できなくて思考がフリーズする美琴…

「なんで見捨ててくれなかったんだよ!!
俺の身勝手でこうなっちゃったのに…!!?!?!」

そうしているうちにエースが叫び声が耳に届いた。
その言葉を聞いたとき、上条の中で何かがキレた。

「見捨てられるかよ!!?!?!」
「!?!」

”白ひげ”が何か言おうとしていたみたいだったが、上条の方が早かった。

「お前は…この船の”家族”なんだろ!?!
家族を見捨てる奴なんてどこにいるんだよ!」
「…!?!」

でもよお…俺はその”家族”の制止を振り切って、勝手に負けたんだ!!俺の責任だ!!」

「…いや…俺”行け”と言ったはずだぜ…息子よ…」

「……………!?嘘つけ!!」

嘘つくんじゃねえよ、親父いい!!」

「いや”行け”と言った…そうだろ?マルコ…」

「ああ…俺も聞いたよ!!」

とんだ苦勞をかけちまったな、エース!!」

パイナップル頭の一番隊隊長のマルコが静かな怒りを身にまとっていた。

「この海にいる奴ならだれでも知っているはずだ…」

俺たちの仲間に出せば一体どうなるかってことくらいはな!!」

「

「お前を傷つけた奴は誰一人として生かしちゃおけねえ、エース!

!!」

「待ってろ!!今助けるぞおお!!!!」

ウオオオオつと声が上がる。

「グラララ!!」

ところでセンゴク…処刑する人数が増えてねえか?」

”白ひげ”も気になっていたのだろう……処刑台の上にはエース以外のイレギュラーがいることに……

センゴクは眉を上げた。

「お前は知らなかったのか？

これは……エースの実の娘だ!!」

「「「……ええっ!!!!!!!!」」」

先程までの”士気”より”驚愕”が勝った”白ひげ”海賊団……船という船から驚愕の声が上がった。

白ひげの声にも驚きの色が混ざった。

「……エース……俺の孫を作ったなら俺に何故言わん……」

「お……親父!これは誤解だ!!!!」

「まったく……まだシラをきるのか、エース?

それよりも……おい”白ひげ”!!何を言っている!?

この娘がエースの娘なら……ワシの”孫”じゃ!!」

海軍中将のガープが声を張り上げた。

「ジジイの孫は”ルフィ”だろ！！
ってか、本当に俺の娘じゃねえ！！！！」

「グララララ……エースは俺の息子だァ……ガープ。
つまりエースの子は俺の孫だ。」

「何を言うか！！」

ワシは悪党に同情はねえ……

だが、エースを引き取って”強い海兵”になるために育てたのはワシじゃ！！

エースはワシの家族！！

つまりワシの孫じゃ！！」

「ちょっとミサカを取り合わないで！！ってミサカはミサカは”一度は言ってみたいアニメヒロインのセリフ”を声高々に叫んでみた
り！！」

「……って、やっぱりお前！御坂妹かよ！！ってか……御坂妹より
小さいから御坂妹の妹か！？」

上条は叫ぶと、口論がピタリ……とやんだ。

「と……トリップしたのはミサカだけじゃなかったのね！！ってミサ
カはミサカは驚いて目を丸くしてみたり！！

ほ……本当はこの場で貴方にミサカ達が受けた恩を返したかったりする
んだけど、ちょっと難しそうだからミサカはミサカはしょんぼり
うなだれてみる……」

「やっぱり御坂妹か！！……でもなんかしゃべり方が違うみたいな

…」

「それ以前にサイズも違うでしょ!!」

「……おい……アレはまさか……」

センゴクがじいっとこちらを見てきた。

その視線の鋭さに思わずビクツと体が震える上条と美琴……
タラリ…と冷や汗まで出てきた……

「まさか…エースの女か!？」

「は…はいいい!？」

これ以上ないってくらい真っ赤になる美琴。

「お前……」

「じょ…冗談じゃないわよ!!!」

わ…私はエースと直接会ったのは今日が初めてだし!!!」

しかし、いくら否定しても一度広がった噂は止められない……

「そうか…実は一度トリップしていたから俺たちの世界について詳

しいんだな!!」

「なるほど…だからトウマが知らないことまでミコトは知っているんだな!!」

「水くせえじゃねえか!!なんで教えてくれないんだ?」

「エースの嫁ってことは、俺たちにとって姉御みたいな感じになるって事か?」

新たな事実…といっても誤解なのだが…を知った海賊たちは現状を半ば忘れて美琴に群がる……

「だ〜かりら!!違うって言ってるでしょ!!
ほら!アンタもなんか言いなさいよ!!」

美琴が上条の方を向く…と、上条は思案顔でこういった。

「そうか……お前は一度こっちにトリップしてたのか……」

ぷっちーん

「だから違うって言ってるでしょ!!!」

キンッと小さな金属音……

美琴の親指が、一枚のコインを弾いた音だった。コインはゆっくりと、ゆっくりと彼女の頭上を舞っている。

「うわっ!! ちょっとタンマ!!」

「問答無用よ!! どうせアンタには……」

コインが再び美琴の親指に着地した。

「……こんな攻撃効かないんだから!!!」

瞬間!!

彼女の異名・超電磁砲^{レールガン}の由縁ともいえる一撃が、解き放たれた。

コインは空気摩擦で赤熱し、オレンジ色のレーザーと化して上条に襲い掛かった。

「や…やめろって!!!」

上条は超電磁砲^{レールガン}を紙一重でかわす。

そのまま超電磁砲^{レールガン}は処刑台へとツツコンでいく…

「やれやれ仕方ないねえ……」

色の薄いサングラスとストライプの入った黄色のスーツを着用した

”ピカピカの実”の能力者……海軍大将・黄猿…本名・ボルサリーノが足を振り上げた。

あまのいわと
「天岩戸」

彼の足に光が集まり、レーザー光線となって超電磁砲と激突した。

ズウドオオオン！！！！

っという音と共に相殺される天岩戸と超電磁砲。相殺された余波の爆風で建造物が破損した。

「！！あの娘…能力者だったのか！？」

「黄猿の攻撃とほぼ同等の攻撃力を持つだと！？」

「お姉さまは学園都市N.O.3の能力者で”常盤台の超電磁砲”レールガンと呼ばれているんだよってミサカはミサカはって…ひゃあ！！」

ラストオーダー
打ち止めは突如感じた揺れに驚いた。

ズズズズズズ！！！！

驚いたのは打ち止めだけではない。

海兵から七武海まで…突如始まったの地鳴りに対して動揺が広がっていく……

「何だ、この地鳴りは!!!!」

「そら来たぞ…」海震”が”津波”に変わってやってくる!!!」

次の瞬間!海兵たちの目に信じられない光景が飛び込んできた。

「な……なんだよアレ……」

上条も目の前に起きている出来事に驚愕の色が隠せなかった。

「実際に聞くのと見るのは違うわね……

”グラグラの実”の能力者で『地震人間』エドワード・ニューゲートの親父の作り出す津波は……」

美琴も思わず目を見開いてしまった……この光景は漫画で知っているはずだった……

だが、実際に現実の光景として見てみると……これが現実かと疑いたくなるような光景だ。

いつのまにか身体が武者震いをおこしていた。

マリンフォード…海軍本部を挟み込むように、島全体をも飲み込むことが可能な巨大さの津波が襲い掛かってきたのだ!!!!

開戦の士気を高めるためセンゴクが海兵に向かって叫んだ。

「勢力で上回ろうが勝ちとタカをくくるなよ!!!」

最期を迎えるのは我々の方かもしれんだ……

……あの男は……

世界を滅ぼす力を持っているんだ……！！！！！！」

攻め入るは……

「白ひげ」率いる新世界47隻の海賊艦隊

迎え撃つは……

政府の二大勢力「海軍本部」「王下七武海」

誰が勝ち誰が負けても……

時代が変わる……！！！！！！

第10話 死にそうになることって朝から何回もあったりする

「すげえ……」

上条当麻は目の前で行われている戦いに手に汗握っていた。

……まず仕掛けたのは親父……つまり”白ひげ”の方だった。

先程の白ひげが起こした”海震”で起きた特大の津波が海軍を襲う。それはマリンファードに覆いかぶさるように襲ってきているので、彼らに逃げ場はない。

「自滅って展開にならなくてよかった……」

「グラララララ……!!」

おれがそんなヘマすると思うのか、トウマ?」

「親父がそんなことするとは思えないけど、俺って不幸体質だから……」

だが、これであっけなく幕引きになるとは思えない……だったら、美琴があんな真剣な顔しているわけがない。きつとなにかがあるはず……

その時だ。なんか全体的に青のイメージの男が宙に浮いていた。……まるで津波を止めようとするかのように……

「おい、御坂…あれは？」

「あれは海軍の大將”青キジ”よ。本名はクザンっていう”ヒエヒエの実”の能力者だ…って…あんだ！！知らないのそんなことも！？」

「知るかよ！！どうせ俺の知識はアラバスタ止まりだよ！！」

青キジという男は津波に向かって両手を広げた。

すると青キジの両方の手のひらから、氷がまっすぐに津波に向かって伸びて行った。

「”氷河時代”^{アイスエイジ}！！！！」

その瞬間！！

パキパキっという音を立てて、あっという間に津波が凍りついていったのだ！！

「そうか…凍らせるから”ヒエヒエ”なんだな……」

「だからアイツは船を使わないで自転車で海を移動しているのよ。」

「へえ……って、マジで！？海王類とかにあったりしたら……」

「海軍の実力者トップ3が海王類に負けるわけないじゃない。」

負けたなんて言ったら切腹モノよ。」

冷めた目で上条を見る美琴……

白ひげは一発で終わらせられなかったからだろうか？ 苦々しい顔をした。

それから重そうに口を開いた。

「青キジイ……！！ 若僧が……！！！」

すかさず白ひげに向けて攻撃を仕掛ける青雉。

「^{バルチザン}両棘矛”！！！」

4本の氷の槍が放たれる！

だが、白ひげは怯む事なく青雉の方に拳を振るって大気にヒビを入れる。

「あらら」

青キジはそうつぶやくと、槍と一緒に青雉の体が粉々に崩れて、海へ残骸が落ちていく。

「おい！！ 大将がアレでいいのか！？

ってか確実に今のは”あらら”って問題じゃないよな？ あんな軽い

ノリですむ問題じゃ…」

「いいから黙ってなさいって!!」

前髪にビリビリっと青い電気を走らせる美琴…話の展開も彼の能力も分からない上条は黙って青キジが落ちていくのを見ていた。

だが、青キジは無事だったみたいだ。

海上で氷の体になって再生したのだ。……美琴はイライラしているので確認をとることは出来ないが、おそらく彼の実の能力に係しているのだろう。

クロコダイルの”スナスナの実”みたいに”自然系”ロギアの悪魔の実の能力者って再生能力があるみたいだから、おそらく”ヒエヒエの実”ロギアというのも、その一種なのだろう。

そう思っているうちに、再生した青キジが海を凍らせていった。

……海が凍ったことでもう…船は引き返せない……

悪く言えば、帰りにくく（逃げにくく）なった。
だが…よく言えば…足場が出来た。

それを思ったのは他の人も同じだったのだろう。
次々と戦場へ降りて行った。その中には先程、上条や美琴を取り囲んでいた”隊長”と呼ばれる人たちも混ざっていた。

「ぐひゃひゃひゃひゃ!!!」

氷漬けの海とは気が利いている!!!」

「気持ち燃えたぎって暑苦しかったところだ!!!」

口々に叫ぶ海賊たち……いや……「ひゃひゃひゃ」はないだろ……なんか、そのしゃべり方だと”死亡フラグ”立ちそうだぞ……っと上条は思った。

「撃ちこめええー!!!」

海賊たちが大砲をぶっ放す。が、弾が海兵たちに届くことはなかった。

その前にスパンっとまっ二つになってしまったからだ。

「海軍の”中将”達だ!!!」

どこからか海賊が叫ぶ声が聞こえる。

確かに強そうな面々がズラリつと勢ぞろいしていた……中に長老みtainな雰囲気醸し出した老女も混ざっていたが……

「始まるのか……」

「ほら! アンタも行きなさい!!!」

「えっ!?!」

美琴に蹴られ、上条は船上から一気にダイブすることになった。

「うう…不幸だ…まあ、エース助けるためだから仕方ない…か…」

思いつきりぶつけた尻をさすると走り出す上条…だったが……

「アレは…確か”鷹の目”！？」

以前、麦わらの一味の剣士・ゾロでも歯が立たなかった最強の剣士…鷹の目って呼ばれていた奴が立っていた。
そういえばアイツも七武海だった…と頭の片隅で上条が考えている
と……

「推し量るだけだ……あの男と我々の本当の距離を…」

と言って鷹の目は黒い大刀を振り下ろしたのだ！！

ドンー！！

刀の放った斬撃が氷の海を割りながら白ひげに向かって飛んできた。
いや…彼自身は白ひげに放ったのかもしれないが……その斬撃の直線状には白ひげの他に……

「不幸だ！！！」

上条もいたりした。彼の右手にはすべての能力を無効化する力……
イマジンブレイカー
幻想殺しが宿っているが、それは”能力”に効くのであって、”斬撃”には効果がない。

走馬灯が上条の脳裏を駆け巡り、上条は目をつぶった……

……が、一向に何も起きない……

「大丈夫か、トウマ？」

恐る恐る目を開けるとそこにいたのは……

「たしか……3番隊隊長のジョズさん！？」

「……覚えていたか……？」

「なんで……アイツの斬撃は”世界一の斬撃”だったはず……って」

その時、上条はジョズの身体の一部が変化しているのを見て目を大きく見開いてしまった。

「だ…ダイヤモンド!？」

そう……ジョズの体の一部が世界一の強度を誇る宝石…ダイヤモンドに変化していたのだ!!

「ああ…俺の能力は体の一部をダイヤモンドにすることが出来る。」

「へ…へえ……なんかすげえな……って……親父い!!」

ジョズの顔を見上げた時、さっき美琴と戦った(?)黄猿という男が白ひげに攻撃するのが見えた。

やさかにのまがたま
「八尺瓊勾玉」

親指と人差し指で作った輪から、無数の光の弾丸を発射する黄猿。先程の技とは違うが、美琴の超電磁砲とほぼ同等の威力を持つ技をつかう奴だ……

「心配するな…親父の所にはマルコがいる。」

「マルコって特徴的なしゃべり方とパイナップル頭の？」

本当に強いのか？」

上条がマルコに抱いた正直な感想は”あまり強くなさそう”だった。少なくとも、このジョズという大男の方が強そうに見える。

「いや…マルコは強い…ほら、見てみる。」

見てみると、青い炎をまとった男が攻撃を全て受け止めている。

「いきなり”キング”は取れねエだろうよい」

「え…えっ!?! なんか再生してる!!」

「そりゃそうだ。1番隊隊長のマルコは別名”不死鳥のマルコ”。世にも珍しい”動物系幻獣種^{ゾオン}”の能力者で不死鳥の再生能力を持っている男だ。」

驚く上条に説明をするジョズ。

確かに上条のしている目の前で青い鳥…おそらく不死鳥に変化して黄猿に一気に向かっていくマルコの姿が見えた。

「アイツは心配しなくていい…ところでトウマ。

お前はあの嬢ちゃんに蹴り飛ばされてここに落ちて来ていたが…
…船に戻るなら今のうちだぞ?」

「戻らねえよ。俺にはすることがあるんだ…っっていうても、ここからあそこまでは距離があるんだよな…」

それを言うとジョズがニヤッと笑った。…正直怖い…

「なら一気に向こうまで進ませてやる。」

「はい？」

「つかまってるよ!!!!」

「う……うわああ!!!!!!」

上条の一気に視界が高くなった。上条は必死で氷塊にしがみついていた。

そう……ジョズが凍った海から、巨人族の10倍以上はある氷塊を取り出して何と投げ飛ばしたのだ。…上条ごと……。

「まあ…一気に進めるからいいけど……て……うわあ!!!!!!」

目の前から溶岩のようなモノが襲い掛かってきた。

アレを喰らったら……死ぬ!!

上条は直感的に右腕を前に突き出した。

狙いの中!

溶岩は能力によって生み出されたものだったので、”幻想殺し”で消し去ることが出来た……のは良かった。

「ふ…不幸だああ!!!!!!」

手を放したことでバランスを崩し、本日2回目の急降下ダイブをす

る上条。

とにかくこのまま落ちたら”死”確定だ。

慌てて自分を支えてくれるモノを手探りで探す。とはいっても……
今はダイブ中……そんな都合の良いものは……

ガシィ！

あったりした。

「あゝ…助かったぜ……って…なんか暖かくて柔らかい気が……つて……」

掴んだモノの正体に気が付いたとき…上条の顔がこれ以上ないって
くらい赤くなった。

あわててソレから離れる。

「あ…えっと！今のは事故って言うか…なんていうか…生命の危機
を感じていたので…その…必死で…」

「ほう…わらわを前にして言い訳か？

わらわの体に触れていいのはアノ方だけじゃ。」

静かな怒りをにじみだす絶世の美女……女ヶ島「アマゾン・リリ
ー」の九蛇達による海賊団・九蛇海賊団船長であり王下七武海の紅
一点で別名が”海賊女帝”…”ボア・ハンコック”が上条の前に立
っていたのだった……。

第11話 美しくて性格もいい女なんていない

「…あれは一体……？」

白ひげ海賊団12番隊隊長であり、大柄な隊長たちの中では珍しく常人程度の身長のハルタは、目の前で起こった出来事に目を思わず見開いていた。

同僚のジョズが持ち上げた凍った海から、巨人族の10倍以上はある氷塊を取り出して、海軍が誇る巨人部隊の半数を潰したから……だけでは無い。

その氷塊が落ちてくるのを阻止しようと、海軍大将の赤犬が立ち上がり、右腕を溶岩に変化させるとそれを氷塊に放っていた……。まるでそれは同じく同僚で親友のエースが操る”火拳”のようなマグマの拳……。

このままでは、跡形もなく蒸発してしまい、そのまま火山弾として地面に落ちてくると思ったハルタは、隊員たちに避難を呼びかけようとした……。が、その溶岩が氷塊にぶつかる前に、跡形もなく消えたのだ。

……ジョズの能力は確か「肉体の一部を”ダイヤモンド”に変化させること」であって、相手の能力を無効化する力なんてない。というより、そんな”海楼石”みたいな効果を操る能力者なんて聞いた

こともない。

元々溶岩なんて放たれてなかったのか？でも……赤犬の能力で確かに溶岩が放たれていた。なのにそれが一瞬で影も形もなくなってしまった。

……こんなことってあるのだろうか……

「ボサっとするなって!!」

ズカーンっ と銃声と共に何かが頭の上を通りぬける。

ハルタが振り返ると、ドサツと海兵が銃弾を浴びて倒れるところだった。

考え事をしているうちに注意力が散漫になっていたようだ。気を引き締め剣を握り直すと、自分を助けてくれた人物を探した。

「サンキューな、イゾウ!!」

「全く……隙だらけだ。」

16番隊隊長で、歌舞伎の女形のような姿かたちをした男：イゾウがはぁ……っ とため息をついた。彼の持っている二丁拳銃のうち一つの拳銃からは、まだ銃弾を放った時の煙がうっすら立っていた。

「何か考え事でもしてたのか？」

「うん……そのさ、今ジョズが放り投げた氷塊あるだろ？あれを赤犬が……」

「あゝ……溶岩が一瞬で跡形もなく消えたって奴？あっちこっちで海兵達も俺たちの仲間も驚いているぜ？いったい誰の仕業だろうかってな。」

「じゃあ……見間違いじゃなかったのか……」

本当に誰の仕業だろう？ジョズの新しいダイヤモンド応用術か？」

「ダイヤモンド応用術！？」

ハルタのつぶやきを聞いたイゾウは笑い始めた。

「あれはトウマの技さ。」

「と……トウマの技だって！？」

あいつにそんな力があるのか！？」

ハルタは襲い掛かってきた海兵を切り捨てながらイゾウに問いかける。

トウマというのは異世界から”白ひげ海賊団”の浴室にトリップしてきた少年の事で、今回のエース救出に協力してくれると言った、これといって戦闘力がありそうには思えない少年だった。

「俺って目がいいだろ？だから氷塊の上にトウマがへばりついてるのが見えたんだよ。」

で、赤犬の溶岩が迫ってっ来たときに、トウマが右手を前に出して溶岩を消したのさ。」

イゾウは襲い掛かってくる海兵達に向かった的確に打ち込みながら答えた。

二丁拳銃使いのイゾウは目がいい。だから彼が言うなら本当にトウマが消したのだろう。

まさか…あの少年にそんな力があつたなんて…

あの短髪少女の方が強いと思っていたけど、違うかもしれない。

「その事…：海軍は気づいているのか？」

「どうだろうな…：至近距離で見た赤犬は気が付いているかもな。だからセンゴクのところまで情報がいつている可能性は高い。」

「そうか…：…ん？」

そういえばトウマの奴は今、どこにいるんだ？」

「…：実は…：…」

イゾウの顔色が悪い。トウマになにかあつたのだろうか？

「あいつ…：そのままバランス崩して落ちてさ…：…：…：こともあろうに”
海賊女帝”^{ハンコック}に抱きついたんだよ…：…：。」

一発逆転の切り札になりそうな少年…：トウマ…：…：彼の寿命はここで終わったかもしれないと、ハルタは思った。

「わ…悪かったって！そんなつもりじゃなかったんだって！！
っ！か、あのタイミングで溶岩が目の前に現れたのが悪いんだって
！！

なんか…もう…不幸だー！ー！！！！」

顔を赤らめながら、頭を抱え込む上条当麻。氷塊に襲い掛かる溶岩
を、右手に宿る力……”幻想殺し”イマジンプレーカーで消したのはいいのだが、その
せいでバランスを崩し氷塊から落ちて………あわてて、支えとし
て抱きついたモノはなんと、絶世の美女だったのだ。

「ん？ってというか、なんでこんなところにアンタみたいな人がいる
んだ？

御坂がいうには一般人はみんな、なんたら諸島に避難しているって
聞いたんだけどな……まさか、逃げ遅れたのか！？」

……上条は目の前にいる美女…ハンコックが”海賊女帝”と恐れら
れる”七武海”だとは知らない。彼の主な原作知識はアラバスタど
まりで、それ以降は穴だらけだからだ。

”麦わらの一味がバラバラにされた”という事実は知っているが、
誰の仕業かは知らないし、その後、彼らがどこへ飛ばされどんな運
命を辿ったのか知らない。

だから、目の前にいる美女は”逃げ遅れた一般人”として認識していたのだ。

「ほう…主はわらわが一般人に見えるか？」

「えっ！い…一般人じゃないのか？」

「…：…なんと…：わらわのことを、この戦場で知らぬものがいたとは…：…」

まあよい…：特別に教えてやろう…：…」

美女は相手を見下し指さしながら後ろにのけぞるポーズをとった。
それは、あまりにも見下しすぎていて、逆に見上げていた。

「わらわは”王下七武海”の1人、”ボア・ハンコック”。
その名をよく心に刻んだまま…：その心にある邪心にやられるが良
い…：」

両手の指でハートマークを作るハンコック。

嫌な予感がした上条は、ハンコックの美しさに顔を赤らめたまま一歩後ずさりした。

「な…なにをする気だよ！？」

「メロメロ甘風…！！！」

ハートマークのようなピンク色の光線が上条を襲った

……が……

「「？」」

何も起こらない。

「おい……あの少年……”海賊女帝”の技が効かなかったぞ？」

「邪心が無いようにには見えないが……」

「まあいい……もし、本当に”女帝”の技が効かぬようなら、俺たちであの少年を倒せばいいからな。」

遠巻きに2人を見ていた3人の海兵が口々に憶測をかわす。

「あ……たぶんだけど……俺の右手がその能力を消したんだと思う……」

「能力を消す能力じゃと？ そんな”海楼石”のような効果があるわけなからう……！」

”メロメロ甘風”^{メロウ}！！！！」

「つつぶねえ！！！！」

上条は避けたが、そのせいで後ろにいた3人の海兵が”奇妙”としか形容できない形で石像になってしまった。

「なぜ、わらわの攻撃を避けるのじゃ!？」

「いや…だって…避けないと不味いし…万が一、右手以外に当たったら不味いし……」

「ってか、こいつら…海兵だよな? お前って……」

「スレイフアロー 虜の矢” !!!!!」

投げキスで作った巨大なハートマークを弓のようにして破裂させ、大量の矢を上条に向けて放った。

避けることが不可能だと感じた上条は右手を使い、自分に矢が当たるのを防いだのだが……

彼らの戦いを見ていなかった海兵達や海賊たちが矢に当たり、一気に石に変化してしまった。

「なぜじゃ!?! なぜわらわの技が効かんのじゃ? …こんなこと…あなたの方以来じゃ……」

「待て待て!! …なんで話の途中で攻撃してきたんだよ!?!」

「…知れたことを…わらわはなにをしようとも許される……」

なぜならば……美しいから!!」

「……………」

呆れて言葉が返せない上条だった。

「いや…確かにあなたは美人だけど……人間していいことと悪いこ

とがあるだろう？

ってか、海賊はアンタの敵だから何も言わねえけど、一応、お前は海軍側の人間だろう？

なんで海兵にまで攻撃すんだよ！？」

「ふん……」白ひげ”と戦うことまでは承諾したが……わらわは仲間になるとは言っておらぬ。

男など皆同じじゃ……あの方以外は……」

「…あの方？（だれだそれ？）

でもよお……それでも協力している以上さ、”仲間”っていうんじゃないのか？」

「言ったはずじゃ……わらわは何をしようとも、美しいから許されるのじゃ。

男などどうなっても構わぬ。むしろ石になった方が邪魔なのが消えて、清々する。」

そういうと、最初に石になった3人の海兵のうちの1人を足蹴りで粉々にした。

それを見たとき、上条の中で何かがキレた。

「お前さ……男にだって命ってもんがあるんだぞ！？」

「何度も言わせるでない。わらわは……」

「命ある者は皆平等なんだ！どうなっても構わない命なんて……そんなの無いんだよ！！」

例えそれが人工的に生み出されたものであっても……

『”人間がいる”と思わせる』物理的情報の集合体のようなものであっても……

奴隷だったとしても……

生きている限り…そこにいて笑ったり話したり悲しんだりできる限り……命ある者なんだ！！

簡単に消えてはいけない大切なものなんだよ！！

消えたら悲しむ人がきつとどこかにいるものなんだよ！！

だから……それを簡単に”どうなっても構わない”なんて言うんじゃない”やねえ！！！！”

ハンコックの動きが止まった。

そして…その美しい顔が一瞬、歪んだように上条には見えた……が、次の瞬間には元の凍てつくような顔に戻っていた。

「ぬしは…わらわが”男”という下等生物をなぜ嫌うか知らないくせに、勝手なことを言うのではない！！

わらわは何をやっても許されるのじゃ……美しいから！！！！

パフューム・フェムル
”芳香脚”！！！！”

ハンコックは休む間もなく蹴りを連発していく。そのけりが当たった箇所はすべて石と化し、崩れて行った。

最初は避けようとしていた上条だったが……

パシィ

「！？」

右手でなんとかハンコックの足をつかんだ。
その瞬間、ハンコックは、まるで海楼石に触れたかのように足に力が入らなくなってしまった。

「お前がなんでそこまで”男”が嫌いになったのか俺は知らない。
でもさ、相当、嫌なことがあったんだろうってことは想像つくぜ？」

「……………」

「その…なんだ？信じてもらえないと思うけど、俺はココとは違う
異世界から来たんだよ。」

で…もしさ、俺がエースを救い出しても帰る術が見つからなかった
ら……

お前が抱いているその幻想をぶち壊してやる！！！！
そのお前の中にある最悪な出来事を消して、救い出してやる！！
…”男”ってそこまで悪いモノじゃないぜ？」

…ハンコックは黙ったままだった…

そして…彼女が口を開こうとしたとき！！

「エースぐん！！！！！！」

今そこへ行くぞオオオ！！！！」

野太い声が湾内に響き渡った。

見ると、巨人族の二倍以上はある巨体を持つ…編み笠をかぶった人間（？）…白ひげ傘下の海賊・リトルオーズJr. が海軍の船を持ち上げているところだった。

「やべえ!! あの大男が船を持ち上げた時には市街地に入って”赤犬”とかいうオッサンかスクアードとかいうオッサンを探さねえと行けねえんだった!!」

慌ててハンコックの足を放す上条。

「待て。主…名をなんという？」

走り去っていかうとする上条の背中に声をかけるハンコック。
上条は振り返った。

「俺？俺は上条当麻!! って…うわぁ!!」

流れ弾をスレスレノところで避ける上条。そのまま慌てて走り去ってしまった。

「……カミジヨウ・トウマ…か…」

ハンコックの脳裏に、彼女の愛しの人…麦わら帽子をかぶった少年が浮かんできた。

彼も…”奴隸”を…”生きている人間”だとみなしてくれた。

ハンコックは自分の背にある…一生消えない刻印を服の上から触った。

「…異世界から来た”男”…か…」

何もハンコックのことを知らないのに…敵なのに…”幻想をぶち壊す”だの”救い出してやる”だの…

…不思議な奴だ。

人の価値観なんて…そう簡単に変わるわけがないのに…

…ハンコックはもう一度、上条に会ってみたかったりしたくなってきた。

「オーズに気を取られていると、攻め落としちまうぞ!!」

下の方から男の声が聞こえた。

ハンコックは黙って唇に手を当てると、投げキッスを作り出した。

「「^{スレイファロー} 虜の矢」！！！」

たちまち男たちが石になっていく。

ハンコックは考えるのを止めて、戦場に向き直った。
いずれ来るかもしれない、最愛のあの方……死刑囚・エースの弟……
ルフィを待つために……

第12話　しばらく会ってないと顔って変わってたりする

「はあ…はあ……」

マリンフォード市街地を走り抜ける1人の海兵の姿があった。

…ここには海軍が誇る最強勢力がいるのだ……中将だって全員集まっている……

俺は…安全だ。…絶対に…生き残ってやる！

…そう心に誓ったはずだったのに……その決心が揺らいでしまった。

いや……正確に言えば音を立てて崩れてしまった。

中将達があんなにそろっているのに、有利に戦を進めていない。

巨人より大きい人間が…あんなにあっさりと湾内に侵入していた。

海軍が誇る巨人部隊だって……さっきの氷塊で半分がつぶれてしまっていた。

そもそも海軍の実力者…3人の大将たちだって、そこまで活躍しているわけではない。

そりゃ…青キジ大将は津波を凍らせたが…海まで凍らせたので足場をつくられてしまった。

黄猿大将だって、あの短髪の小娘が放った光線を相殺させていたが…あの不死鳥になれる能力者に海面へ蹴り落とされていた。

赤犬大将だって……確かに、あの氷塊を消そうと溶岩を出した…

…のに、氷塊に当たった瞬間に溶岩が跡形もなく消えてしまった。……否。正確に言えば……氷塊の上にへばりついてた少年の右手が身体の何倍もある溶岩を消していた。

それは……見間違いではないはずだ。

だって……自分は”視力”を買われ海軍へ入隊できたのだ。

見間違えるわけがない。

改めてそう思うとゾクウツと体に電気が走ったかのように震えた。

黄猿同等の光線を放つ少女……巨大津波をいつでも起こせる”白ひげ”……どんな攻撃を受けても再生する不死鳥……あんな巨大な氷塊を楽々持ち上げる男……それに……まるで海楼石のような能力を持った少年……

「勝ち目が……あるわけない!!」

「どこへ行く気じゃ？」

びくうっとして立ち止ると……そこにいたのは……

軍帽と薔薇を胸にさした赤いスーツ……海軍大将・赤犬がそこに立っていた。

「早く戦場にもどれ!!!」

「はあ……はあ……」

まさか…ここで出会うなんて…海兵は走ったせいで荒い息をしながら赤犬を見た。

誠心こめて言えば…伝わるかもしれない……

「…み…見逃してください…!!!」

死ぬことが怖くなった。家族を思うと…

足がすくむんです…!!!…どうか……」

「本当に家族を思うちよるんなら…

”生き恥”をさらすな…!!!…」

見る見るうちに身体が溶岩へと変化していく赤犬…

ああ…俺の人生終わった……つと海兵が思った瞬間だった。

「てめえ!!!待ちやがれ!!!」

「き…君は…!?!」

「…誰じゃ?」

はあ…はあ…つと膝に手をつき息を整えていたのは…つんつん頭の少年……

たしか……

「君は…あの氷塊の上にいた…?」

「あっ…お前見てたのか?」

つてことより……お前!今さ、何しようとしたんだよ!!!」

キリットした目で赤犬をにらむ少年……なんで海賊の少年が俺を助けようとするんだ？

海兵には理解できなかった……

「……何をしようとしたか……じゃと？

それは……こうしようとしたんじゃけん！！！」

赤犬は溶岩に変化した腕を振り下ろした。

目の前に現れた少年は……先程、氷塊の上にへばりついていた少年だったはずだ。

よく覚えている……確か少年の右手が自分の溶岩を消したのだ……飛ばしたのではない。初めからなかったかのように消えたのだ。

……このことはまだ上に報告していない。

本当に彼の右手が消したのか？海楼石のようなものを仕込んでおいたのか？それとも……あの氷塊自体に細工を施しておいたのか……

不確定なことが多すぎるからだ。下手な情報を流して混乱させては

元も子もない。

……これから大事な作戦を控えているからというのもあるが……

どちらにしろ……ここで少年を潰す。潰せなかったら……その時考えればいい。

「やられるかよ!!」

少年が右手を前に出すと……やはり溶岩が跡形もなく消えた。

「な……んで……」

少年の後ろにいる腰抜け海兵がオドオドと尋ねていた。

「決まってるだろ! 見捨てられるか!

ってかオッサン!! なんで仲間に攻撃すんだよ! 見てたけどよお……こいつはもうとつくに戦意がなかったのにさ……

なんで”生き恥”って発想になるんだ?

死んで家族を悲しませるより……生きて帰って笑いあった方が幸せじゃねえか!!」

「……海兵が”悪”かいぞくに背を向けるなど言語道断じゃからじゃけん。」

笑わせるガキだ……と赤犬は思った。

何故、海賊が海兵を助けるのだ? それ以前に海賊が正義面している

ことに腹が立った。

正義は海軍。悪は海賊なのだ。

それよりも……あのガキは、やっぱり右手で攻撃を無効にしていた。左手の方が出しやすい状態だったのに……やはりあの右手に何か隠されているのだろう。

さっさと始末した方がいいかもしれない。

「に……逃げろ!!」

アレは海軍・大将の”赤犬”様だぞ!!」

「へえ……アレが美琴が言っていた……で、あんたは海兵……なんだよな？」

「は……はい……」

「あ……不幸だ。」

スクアードって奴じゃなかったのか……」

「おしゃべりは……そこまでじゃ。」

再び身体を溶岩にする赤犬。

そして次は……右手だけじゃ抑えきれないくらいの大きさの溶岩を作り上げる。

「まだ……能力は……右手だけじゃないんだぜ!!」

ずっと握っていた左手を高く上げる少年。一瞬だけ赤犬の動きが止

まった。

それを見逃す少年ではなかった。

「とりゃ!!」

ボワン!!!

少年が左手に持っていた丸い球が霧散し、辺りに煙が立ち込めた。

「煙幕…」

煙幕が収まったときには、あたりに誰もいなかった。

「サカズキ大将。作戦の準備が整いました!!」

電伝虫から声が聞こえる。

「分かった…それからセンゴクに伝えるんじゃ…」

”海楼石”に似た能力を右手に宿す少年が海賊にいるとな……」

「あゝ死ぬかと思った……」

ぐてえゝゝつとその場に横になる上条。

「御坂の奴がしっかり考えておいてくれたおかげで本当によかったぜ……」

戦争の前、美琴がイズウから「女の子が戦っちゃ不味いだろ。言ってもいかないと思うけど……まあ……万が一のためにコレを渡して置くぜ」つと言われ渡された”ワノ国特製煙玉”……。

「どうせアンタにはガチンコ勝負は出来ないでしょ？ さっさと隙を見つけてコレを使って逃げなさいよ！」
つと言って煙玉を譲り受けたのだった。

「にしても、アンタもありがとな。」

「い……いえ……だって……なんとなく……このまま死なせられないって思いましたから。」

ピンクの髪にバンダナにメガネを額にかけた少年が弱弱しく笑った。

煙玉に紛れて、海兵と一緒に横道に入った時に、この少年が『こっちです!!』

つと言って安全そうな場所まで連れてきてくれたのだった。

「まったく…海賊がなんで海兵を助けたんだ!？」

ピンクの少年の友人なのか…一緒についてきていた金髪の少年が呆れた感じで声を上げた。

「だってよお…フツー助けねえか？」

「そうか?…まあ…そういうものか？」

「それより、いやあ…助かった……ん? その声…どっかで聞いたことがある気が…」

名前…なんていうんだ？」

「ぼ…僕はコビーと言います。海軍曹長です。」

「俺は海軍軍曹・ヘルメツポだ。」

「コビーに…ヘルメツポ……って…」

ええ!?! あの贅肉だるんだるん少年とモーガンの七光りのバカ息子!!」

物語超序盤で登場した弱気な少年と、ゾロを処刑しようとした七光りを振りかざす少年が……目の前にいるなんて…

「えっ…昔の僕たちを知っているんですか？」

「うう……その……まあいろいろとあつてな。」

2人から目をそらす上条。…そして目をそらすとそこには、うずくまって震えるさっきの海兵がいた。

「なんで…俺を……海賊のアンタが…」

「あゝ…俺って海賊じゃないんだよ。なんつーの？一般人なんだけどエースを助けに来たって感じか？

それにさ、人を助けるのに理由っているか？

俺はあの赤犬とかいうオッサンの正義に共感できなかったから助けただけだって。」

「………」

「義のために死ぬよりさ、しっかり生きて帰って家族と笑う方がいいに決まってるだろ？」

「…あ……ありが…とう!!」

海兵はオウンオウンと泣き始めた。

しかし…これから、どうしたらいいのか…

美琴から言われた作戦は、『スクアードが白ひげを刺すのを止めさせる』こと。

そのために『スクアードが赤犬の言葉に騙されている途中で乱入し、煙玉を使ってスクアードと一緒にその場を離れる。そして、安全そうな場所で説得を試みる』…ということ。

だが、もう頼みの綱の煙玉は使ってしまった。

今からもう一度、赤犬とスクアード探しをしても構わないが、逃げ切れる自信は0%だ。

ぶっちゃけ、あの怖面男ともう一度、ご対面したくない。

「…き…聞いた！？ヘルメツポさん…今の作戦！？」

上条が考え事をしている間に、コビーが何か作戦を無線か何かで聞いたらしい。

「ああ。」

「一体どうしたんだ！？」

上条が尋ねると、一瞬、言おうか言わまいか戸惑う顔を見せていたが、言うことに決めたようだ。

コビーは半分、震えていた。

「エースさんの処刑を予定を無視して執行するって！！！！」

「はあ！？そ…そんなことしたら……」

そんなことしたら…”白ひげ”が黙っていない…はず…何を考えているんだ？

「ん…あれって…」

「何か降って来るぞ？」

海兵はいまだに泣いているので動かなかったが、上条・コビー・ヘルメツポは上を向いた。

なにかが…落ちてくる……

「だから おめーはやりすぎだってんだよ!!」

「コイツのまばたきのせいだ」

「ヴァターシのせいにする気!!? クロコォ!!!!」

「どーでもいいけどコレ死ぬぞ!! 下は氷はってんだぞ!!!!」
「！」

その声は他の海賊・海兵達にも聞こえたらしい。

戦う手を止めて上を見上げる者が増える。

処刑台の上のエースも上を見上げ…ラストオーダー打ち止めも満面の笑みで上を見上げる。

「来た! ようやく来たよ!!」ってミサカはミサカは喜びを全身で表してみたかったりするんだけど、手に重い手錠が付いていて表せなかったり!!」

「来たって…誰が…?」

エースは言葉を失った。：落ちてくるものの正体に気が付いたからだ。

「ああああああ……」

あ！おれゴムだから大丈夫だ！！！！」

「貴様一人で助かる気カネ！！！！ 何とかするガネ！！！！」

「てめエの提案なんて聞くんじゃないぞ

麦わらァ！！ 畜生ォ！！！！」

「こんな死に方 ヤダッチャブル！！！！

誰か止めて~~~~~ンナ！！！！」

「つち……うるせエなァ……」

「安心してください！！ 落ちるのは海のはずです……と、

ミサカはミサカが抱いている落下の恐怖を我慢して、皆さんを安心させようと叫びます！！！！」

そう……落下してきたのはインペルダウン脱走組。

「ルフィ……と一方通行に御坂妹！？」
アクセラレータ

あっ……クロコダイルに……バギーに……だれだあの顔でか！？」

原作を知らない上条は驚愕の声をあらわにした……

今後…戦況がどうなるか分からない…
でも…これが何かしらの転機になる…そうどこかで感じた。

第13話 空から少女…じゃなくて脱獄囚が落ちてきたら、パズーは助けなかつ

「ど…どういこと…？」

万が一……上条に頼んでおいた「スクアード説得作戦」が失敗に終わることも考え、船内に隠れていた御坂美琴は自分の目を疑った。

監獄・インペルダウンから脱走したルフィ達が乗ってきた軍艦は、急に大きな津波に攫われ、その後突然海面が凍った為に、その津波の上に取り残されてしまう。

まさか”白ひげ”VS”青キジ”の仕業だとは知らないルフィ達……というより、主にバギー一行がパニックに陥る……そのうちにクロコダイルが、戦争はすでに始まっていることに気が付く……

そこで、ルフィが状況を打破するために、”凍った波を艦で滑り降りて抜け出す”という作戦を立てるのだが、賛同はあまり得られない……。

そんな時のことだ。

”全艦全兵に連絡！”

目標はTOTZ 陣形を変え通常作戦3番へ移行……準備ぬかりなく進めよ 整い次第予定を早め……

エースの処刑を執行する”

という無線が軍艦に入ったのだ。

エースの処刑が早まってしまふ……そこで、これを聞いたルフィ達はエース救出に向かうべく、急いで艦の下にある氷を破壊……したのはいいのだが……

「……ルフィ達に乗った艦は、滑り落ちる事なく逆方向に落ちて……みんなの注目を浴びながらド派手に参戦……ってハズなのに……

なんで一方通行アクセラレータがいるわけ……!!!!」

美琴は、はるか上空からダイブ中の人影の中に、見覚えのある白髪の少年をみつけたのだった。

まさかトリップしてきたのが自分と上条だけではなかったのか……と驚く……が、よく考えてみると、エースの隣にちよこん……と座っている幼女は、どこからどうみても学園都市の産物……シスターズ妹達の1人だ。……他にトリップしてきた人がいてもおかしくはないのだが……

「でも……よく、あの第一位が人助けする気になったわよね……アクセラレータ エース救出それ以前に、あんな奴でも漫画読むんだ……」

アクセラレータ一方通行的にはエースなんてどうでもいいのだが、エースの横で今にも処刑されそうな幼女……ラストオーダー打ち止めを救出するために来たなんて、美琴が知るはずがない。

夏休みに起こった、とある一件から…いやその前から”残虐で悪党
キャラの学園都市第一位の能力者”
と認識していたのだが、新たな一面をみたような気がして、なんと
なく複雑な気持ちになる美琴だった…。

…さて、軍艦が空から真っ逆さまに落ちてきたことに海軍も海賊
も…シャボンディ諸島で戦争を見ている一般人も何事か！？と注
目する…その中で、まっさきに姿を現したのは…

「…はあ…はあ…いた…」

赤い服に…麦わら帽子がトレードマークの少年が荒い息をしている
……

それを見たエースは目を見開き……

「る…ル…」

あなた

「一方通行 ああ！！！！ミサカを迎えに来てくれたのねって、ミサカ
はミサカは喜びのあまり満面の笑みを浮かべてさけんでみたりー
ー！！！！」

……エースが力いっぱい、ここまで来てしまった弟の名前を叫ぼうとしたのだが、打ち止めが遮ってしまった…。
ルフィの方も、エースを見つけたら開口一番で「エースく……!!」って叫ぼうと思っていたのに、見知らぬ幼女が、エースと一緒に処刑台の上にいたので、驚きのあまりリアクションが出来なかったりする…。

「つたく…世話かけンじゃアねエっての!!」
無事かア、ラストオーダー打ち止め!!!?」

白髪に赤眼が特徴的で、近代的な松葉づえっている少年が声を張り上げた。

「…おい…アレはだれだ?」

センゴクは、落下してきたのが、クロコダイル・ジンベエ・イワンコフといった面々からして、インペルダウン脱走組だということは分かっていたし、この戦場に”このような形”で七武海のジンベエが来たので、”ジンベエが七武海の称号剥奪を覚悟して動いている”ということに怒りを感じていた…。

だが、それを上回る以上に突如、現れた少年に得体のしれない不安感を感じていた。

自分の知らないザコ海賊囚人かもしれないのだが、少年の鋭い瞳孔：ただずまいから強い気迫みたいなのをセンゴクは感じていた。

「はっ：すぐさま調べ：」

「学園都市・最強の能力者：一方通行だよってミサカはミサカはセンゴクさんに教えてあげちゃったり！」
アクセラレータ

エースの娘（？）が海兵の言葉を遮ってセンゴクに笑顔を向けた。

「アクセラレータ：聞いたことがないぞ？」

「あの人は強いよ：また：助けられちゃうなってミサカはミサカは、せっかく今度はミサカがアノ人を護るって決めたのに早々にまたあの人に頼ることになったから：しょんぼりしてみたり：」

「強いのだな：：：どんな強さなんだ？」

ダメもとで尋ねるセンゴク：だったが：：：

「平たく言えば”反射”だよってミサカはミサカはアノ人の技を教えてあげちゃったり！！」

これはアノ人を売ったのではなく、教えたところで勝てるわけがないって思うからなのだってミサカはミサカは説明を追加してみたり
！！」

「：”反射”：か：」

超新星^{ルキー}の1人…南海出身^{サウスブルー}の3億5千万ベリーの賞金首…”ユースタス・キッド”の能力…”反発^{リベル}”のように、磁力で鉄を操る能力なのだろうか……

まあ…直に見た方が早いのかもしいないな……
そう思うとセンゴクは、戦場に目を戻した。

「ん？クロコボーイは？」

さっきまで近くにいたはずの元・七武海のクロコダイルの姿がないことに気が付くオカマ王で革命軍の幹部…イワンコフ。
それとほぼ同時の事だった。

「！」

白ひげの背後にいつの間にかクロコダイルが回り込んでいたのだ！！
そもそも、この男の中に”エースを助ける”というキーワードは全くない。

元々は敵だったルフィに協力したのは、恨みに思っていた”白ひげ”の首を取るためだった。

そして今！その悲願を達成しようと行動に移ったわけなのである。

「あそこだ!!」

あんにゃろ! 抜け駆けしやがって!!」

クロコダイルより、はるかに実力が劣るのに”白ひげ”の首を本気で取るつもりでいたバギーが叫んだ。

「クロコダイルが”白ひげ”を狙った!!!」

「親父いい!!」

口々に叫ぶ”白ひげ”傘下の海賊たち:

「久しぶりだな:”白ひげ”!!」

今にもクロコダイルが襲い掛かろうとしたその時!!!

ドカァン!!

ルフィがクロコダイルを蹴ることで攻撃を阻止したのだった!!
本来なら自然系ロギアの彼に触ることは出来なかっただろうが、”スナスの実”の能力者で砂人間のクロコダイルは”水”が弱点だ。
さっき海から落ちた時にルフィの足は濡れていたなので、攻撃するこ
とが出来たのだった。

邪魔されたことでクロコダイルのご機嫌は斜めだった。

「俺とお前との協定は達成された……なぜ”白ひげ”をかばう!？」

「やっぱり、このオッサンが”白ひげ”か……」

じゃあ手を出すな。エースがこのオッサンを気に入ってるんだ!!」

：そんなルフィを見た”白ひげ”は彼の麦わら帽子…を見て”ある男”を思い出していた。

「小僧…その麦わら帽子…昔よく”赤髪”がかぶっていた奴によく似てるなあ…」

「おっさん…シャンクスを知ってんのか!？」

これはシャンクスから預かってんだ。」

振り返って”白ひげ”を見るルフィ…その顔を見た”白ひげ”は、エースが手配書片手に自慢げに話していた”弟”を思い出した。

「兄貴を助けに来たのか？」

「そうだ!!!」

「相手が誰だかわかってんんだろうな

おめエごときじゃ命はねエぞ!!!」

「うるせエ!!!! お前がそんな事決めんな!!!!」

おれは知ってんだぞ。お前海賊王になりてエんだろ!!!」

”海賊王”になるのはおれだ!!!!」

堂々と”白ひげ”の気迫に動じることなく言い放つルフィ。

「……………クソ生意気な……」

ニヤリと笑みを浮かべる白ひげ。

…それはどこか嬉しそうな表情だった。

「足引っ張りやがったら承知しねエぞ　ハナツタレ!!!!」

「おれはおれのやりてえ様にやる!!!!」

エースはおれが助ける!!!!」

ルフィは”白ひげ”に頼る様子を一切見せていなかった。

自分の兄貴は自分の力で助ける!!

そうルフィの顔に書いてあった。

「…………ふん…邪魔しやがって…」

誰しもが”白ひげ”に臆しないルフィに白目をむく中、クロコダイ
ルは、もう一度、”白ひげ”を倒そうと攻撃準備に入っただが……

「!?!身体がうごかねえ…」

「アンタは動かないでくれる?」

クロコダイルの前に現れたのは…:さっきまで行動を共にしていた、
”正義の門”を開けた少女にそっくりな少女だった。

服装も:身長も:髪型も…:違うのは、さっきまでの少女には表情
がなかったが、目の前にいる少女は、感情の豊かさが表情にハッキリと出ていた。

「…てめ…さっきとずいぶん様子が違うじゃねえか…」

「さっき?…:…って…ええ!!妹達シスターズがもう一人、トリップしてたの

!?!」

まだ海に半壊した状態で浮かんでいる軍艦の中に自分とそっくりな
少女を見つけて、驚く少女…

「…まあ、一方通行とか上条あいつもトリップしてきてるわけだし…:」

「トリップ?…:というかアレはお前の妹なのか…?」

「うゝん…:…いいや。妹で。」

まあ、それよりも…:一旦は親父から離れてもらうわよ。」

相変わらず身体が思うように動かない…:というより全く動かないク
ロコダイル…:

「…能力者…か…」

「まあそんな感じね。」

私の発電能力の応用で、磁力を操作して…あんたの砂を操っているってわけ。」

「…っち…」

満足げに話す少女に舌打ちをするクロコダイル……

クロコダイルは全身砂に変化できる砂人間………目の前にいる少女に”砂自体”を操られてしまっているため、全身のコントロールを奪われているようなものなのだ。

「…こんな小娘に………!!」

”白ひげ”からどんどん引き離されていくクロコダイル……

「あら、恥じることはないわよ。」

だってこの美琴様は学園都市・第三位の能力者なんだから!」

にっこり笑う美琴。…それに対し聞きなれないキーワードに眉をかめるクロコダイル。

「ガクエントシ? どういう意味だあ?」

「知らなくて結構。さあしばらく大人しくしててね!!」

満面の笑みを浮かべ、クロコダイルを船からはるか遠くへ追い出す美琴。

「さて…アイツはしっかりやってるでしょね？」

今頃…上条は赤犬と向かい合っているのかな…っと市街地の方を眺め見る美琴だった…。

第14話 銭形がルパンを捕まえる日なんて一生来ない

「じゃあ、俺はもう行くな!!」

「き…気を付けてくださいね!!」

「生き残れよな!!」

敵である上条当麻に敬礼をするコビーとヘルメツポ。

一般人とはいえ海賊に協力している上条は、海軍の海兵である2人からしてみると敵ではあったが、先程、上条が敵であるはずの海兵を命がけで助けたのを見て……敵とは思えなくなっていたのだった。

きつとどこか……別の所であっていたら友達になれたかもしれない

……

コビーとヘルメツポにとって、そう感じる上条との出会いだった。

上条は振り返って手を大きく2・3度振ると走り出した。

「つたく……早くしねえとやばいかもな!!」

上条当麻が向かう先は”モビー・ディック号”。

スクアードへの説得が出来なかった……

このままでは、美琴が話してくれた原作通りならば、”白ひげ”がスクアードに刺されてしまう!!

”白ひげ”：こと親父と話したのは、たった数分だったが、突然やって来た謎の人物である上条と美琴を自分の”息子”と”娘”として暖かく迎え入れてくれるような大きな器：にひかれたのだろうか？

まだ出会って間もないのに上条は”彼を死なせたくない”と思うようになっていた。

彼を死なせないために、”白ひげ”にスクアードが裏切って刺そうとしているっということを一刻も早く伝えなければならない。

上条はエース救出を一先ず置いておいて、親父救出（？）に向かったのだった。

処刑を速めるとは言っていた…でも、論理は分からないが、ともかく戦にルフィやあの一方通行が参戦したのだ！
これほど心強いことはない。

エースは彼らに任せて、自分は目の前で、危険が迫っていることを知らない命を助けようと走った。

だが、彼は1つ…大きなことを忘れていた…：

彼がここまで来た道のりの半分は、ジョズの取り出した氷塊にしがみつく形で進んできたということを…

今度は自力で、その道のりを進まなければならない…

とはいっても、8月31日の日なんかは、全く手を付けていなかった宿題に追われながらも、昼間はアステカの魔術師と命を懸けた鬼

ごっこをし……ファミレスであらぬ罪を着せられたせいで店員さんたちから追われながらも攫われたインデックスを探しに走り……その延長戦でインデックス誘拐犯である魔術師・闇咲逢魔の願いを聞くため、学園都市から外出しなければならず、セキュリティーを強行突破し……また、新学期があるので夜中中に再度、強行突破して帰還した……というほぼ、走りまくりの一日を送ったことがあったので、この程度の距離は彼にはどってことないのかもしれない……

「はぁ……はぁ……」

荒い息をしながら上条は走り続けていた。

（ちっくしょー！全然距離が縮まらない気がする！！）

上条は軽い舌打ちをした。……だが、諦めないで走り続けていると……

ドンッ！！！！

とにかくモビー・ディックに向かって走り続けていたので周囲への注意がおろそかになっていたのであろう。誰かと激突してしまったのだった。

「わ…わりい!!」

「す…すみません!!」

「……た…たしぎいー!!?」

上条がぶつかった相手は、ゾロの亡き幼馴染のくいなに外見も性格も瓜二つ…で、額にメガネをかけている海軍の女曹長…”たしぎ”だった。

「え…私の事…しっているんですか?」

「えっと……まあ……そう!あの、スモーカー大佐の一番の部下なんですよね?

俺って、大佐のファンだから……その人の元で戦えるたしぎさんって凄いなあ…って思ってたんですよ!!」

…嘘…とは言い切れない。

ルフィ達から見たら敵である海軍の中でも、上条が…ファンとまではいかないが、まあ気に入っているキャラが、スモーカーとその部下であるたしぎだった。

「す…凄いだなんて……というか…その……大佐じゃなくて准将ですよ?」

「えっ!!そうだったんですか!?!?ってことは…たしぎさんも出世したんですか!?!」

「まあ…曹長から少尉になりました。」

「へえー!!。おめでとうございます!!」

上条がほめると、戦場なのに嬉しいのか顔を赤らめるたしぎ…
だったが、すぐに何かに気が付いたようだ。

「それはそうと、一般人が何でこんなところにいるんですかー！
？」

……どうやら、上条の事を勘違いしているようだ……

まあ…服装からしたら標準的な高校生の着る制服を着用している上
条は、海軍にはもちろん、海賊にはあまり見えない……

が、この戦場の中、海兵でない格好をしているものは海賊としか考
えられないのに、たしぎは会話の内容から”一般人”と認識したよ
うだ。

まさか、海賊が自分たちの事を”ファン”というわけがない……と
考えたのだろう。

だが…それはある意味、上条にとって好都合であつたかもしれない。

たしぎは能力者ではない、剣士だった。

だから頼りの右手は通用しない。

このまま一般人と誤解してくれていた方が、何かと助かるかもしれ
ないと、上条は考えた。

「えっと…まあ…確かに一般人ですけど…」

「ここは危険です！！私が誘導するので安全な場所へ避難しましよ

う!!」

「いや…その…俺には用事が…」

「用事？」

「えっと……そう！モビー・ディック号に攫われた知人が乗っているとかいないとか聞いて…」

攫われてはいないが、知人（白ひげ）が乗っているのは確かだ。

上条は冷や汗を流しながら、たしぎから目をそらす。いかにも怪しい雰囲気だった……彼女はそんなことに気が付いていないようだ。

「攫われた知人がですか!？」

「え…ええまあ……」

「その方は私たちが責任を持って保護するので、貴方は避難してください！」

助けたいのは分かりますが、あの船は世界最強の男……白ひげ”が乗っています。下手に一般人が動くと、あっという間に死んでしまいますよ!？」

…まさか、その”白ひげ”を助けに行くなんて言えない…

「それでも、俺は…」

「ダメです!ほら、行きますよ。ついてきてくださいね?」

「たしぎいー!!…何やってんだ!!」

少し離れたところから放たれた怒声。

「は…はい！なんでしょうか、スモーカーさん！！」

「なにをチンタラしてんだ！？」

巨大な十手を振り回しながら、こちらを見てくるのは葉巻を2本啜えた男…

海軍大佐…じゃなくて准将のスモーカーだった。

「逃げ遅れた一般人を保護しようとしていたんです！！」

「一般人だぁ〜？」

スモーカーの目が上条を捕えた。

「…こいつのどが一般人だ！！そもそも、こんな戦場に一般人がいるわけねえだろ！！」

「え…でも…」

「シャボンディに避難する際に、住民全員避難船に乗ったかどうか、チェックしてから避難船は出航したんだ。つまり残っている奴はいねえはずだ。」

「！？そうなんですかー！！？」

いや、そのくらいのこと知っておけよ…っと心の中でツツコむ上条だった。

「騙したんですね!？」

「いや…騙してなんかねえって!! 俺は本当に海賊じゃない、ただの平凡な高校生であり一般人だし……あの船に用があるのも本当だし…」

「問答無用です!!」

上条に向かって刀を振り上げるたしぎ。

「ふ…不幸だ…!!!!」

バシィィ!!!!

「なっ!？」

「…あ……」

上条は、頭上に振り下ろされた刀を両手で受けていた……すなわち……

「「真剣白刃取りいー!!!?!」」

たしぎと上条の声がもった。

「ば…バカな…実戦でコレが出来る人が存在するなんて…」

「えっ？実戦向きの技じゃないの？」

「当たり前ですよ！！それは実戦向きの戦術ではないんですよ！？」

「へ…へえ……」

「ったく……ボサってしてんなら俺が殺るぞ！」

白い煙が上条の方へ向かってきた。

そう…たった一人の少年…上条を仕留めるのに手間取っている部下を見るに見かねたスモーカーが、己の手で上条を仕留めようとして来たのだ！！

「ホワイトスネーク！！！」

スモーカーの腕全体が蛇型の煙に変わり、上条を捕えようとした。

そう…海軍准将・スモーカーは”モクモクの実”の能力者で煙人間だ。

身体を自由自在に煙に変化させることができるのだった。

だから…通常なら物理攻撃なんて喰らわないはずだった…が……

「そう簡単につかまってたまるか！！！」

上条は右手に宿る幻想殺しで、自分を捕えようとするスモーカーの

イマジンプレーカー

腕を、煙から元に戻すと、そのまま一気に彼の腹めがけて渾身の拳を放った。

「!？」

自然系ロギアの能力者で煙に変化することで物理攻撃は無効化されるはずなのに、拳があたり一瞬、理解が出来ないスモーカー。

「煙の俺に攻撃しただ?!?……まさか……”覇気”か? いや……そんな感じには見えなかったな……」

”覇気”? なんだよそれ……(後で御坂に聞こうか?)」

「……しらねえんだな……なら………新手の能力者か!?!」

そうやって身の丈ほどもある十手を背中から引き抜くスモーカー……上条はそれを見て焦った。

まさか……もう一度”真剣白刃取り”が出来るとは思えない……あれに当たったら……”死”が待っている気がした……

(つくそおー俺はこんなところで死ぬわけには……)

その時、現在の上条にとって都合のいいモノが目に入った。彼にとっては迷惑かもしれないが、どうしても上条は船に行かなければならない。

となると……彼を利用するしか……なかった。

「(すまん!!) : ああ!! あんなところに” 麦わらのルフィ” が
!!!!」

「なんだって!!」

攻撃する寸前で、攻撃の手を止め、上条の指した方向を見るスモーカー……
確かにそこには、海軍大佐” 黒檻のヒナ” の攻撃をかわして進むルフィの姿が……

「麦わらあ————!!」

すぐさま身体を煙に変化させると、ルフィの方へ飛んでいくスモーカー。

あわててたしぎも後を追っていく。

「…助かった…」

元々あの二人組は自分たちの管轄であった” ログタウン” で捕え
損ねたルフィを捕まえるために、偉大なる航路入りしたのだ。
グランドライン

何があっても” ルフィ” を捕えることが最優先なのだ!!

「…なんかルフィとスモーカーの関係って、
ルパンを追いかける銭形みたいだな……
って、こうしている場合じゃねえや!!」

2人から攻撃される心配が一先ず無くなったので、先へと上条は走り始めた……

危険が迫っていることを知らない親父の待つ船へと……

第15話 昨日の敵は今日の友 (前書き)

お気に入り登録件数が100を突破しました!!

ありがとうございます! 今後も精進していきたいと思います!

それから、この回からオリキャラを少しずつ登場させるつもりです。

第15話 昨日の敵は今日の友

「ジョ——ダンじゃな——いわよ——う！」

くると回りながら海兵を蹴り飛ばしていく脱獄囚Mr. 2…ボン・クレー。

忘れている人もいると思うので書いておくが、原作ではインペルダウンに残った彼（…いや彼女というのか？）だったが、ミサカの能力のお蔭で彼が残る必要がなくなり、ルフィ一行と一緒にマリヌフ・オードに来ていたのだった。

「もう！麦ちゃんと離れちゃったじゃないの！

一体どこに行ったのかしらー！！！！」

きよろきよろと自分の友人であるルフィを探すボン・クレー。おそらく処刑台にいるエースの方へ向かっているのだと推測はされるが……

あの場所には、海軍の元帥と中将のガープがいる……寿命を削ってまで治療をし、イワンコフが撃ちこんだテンションホルモンでなんとか身体を活性化させて動いているルフィ……つまり本当は見た目より体はズタボロで動けないはずなのに、それを酷使して大技を繰り出し続けているのだ……。

その辺の雑魚とならやりあえる身体だと思うが、そんな大物を相手

に戦える身体ではないのだ。

「まったく…これじゃあ兄貴を助けたとしても、麦ちゃんが死んじやうじゃないのよ!!」

「…そうだわ!!…いいこと思いついたわよー!!…!!」

彼の役にたてそうな作戦を思いついたボン・クレー。

思いついた日が吉日っということできっそく行動に移すことにした。

まずは戦場で、ちよっくら一人の海賊を拉致し…そのまま戦場となつていない市街地へ向かう。

「これくらいで気絶してんじやないわよー!!」

これじゃあ、実行に移せないじやないの!!……処刑が早まるっていうのに……」

…だが、彼が拉致した人物は目を覚まさない。

……暇だ……仕方ないので彼はその場でクルクルと回ることにした。

「あゝ退屈よー戦場で退屈って何?……ん?」

その時、ボン・クレーは奇妙な光景を見た。

路地の壁に向かって、せっせと何か作業をする人影を見たのだ。

「ちょっとー！？あんた何者！？」

人影はピタリ…っと動きを止めて、ゆっくりとボン・クレーの方を向いた。

「って…なにしてんだよ…アイツ…」

上条は自分の目がおかしくなったのかと思った。

そう…あのラストオーダーとか呼ばれていた少女を助けるために来

たはずの一方通行が、何故か助けに向かわずに、海兵…ではなく海賊を倒しまくっているのだった。

「つてめ!!なにしてんだよ!!」

上条が呼びかけると、一方通行は不気味な笑みを浮かべて…おそろく足元のベクトルを操作したのだろう…高速でこちらに近づいてきた。

「つて、お前の”反射”は俺には効かない事忘れたのか!？」

右手で突進してくる一方通行アクセラレータの顔面を殴る上条。案の定、あらゆる能力を打ち消す右手は、一方通行の反射にも例外ではなく、メキッという音とともに、彼は殴り飛ばされた。

「……っつ!!?……おィ…なんでテメェがこの世界にいたア？」

一方通行が立ち上がると、上条を見て言った。
が、ここで上条は違和感に気が付いた。

「おい…お前…俺だと分かってて突進んしてきたんじゃないのか？」
「突進?俺はそんなことしてねエぞ?」

おかしい…何かがおかしい…上条の中で違和感が広がっていく。
そんな中、一方通行は何かに気が付いたのか、軽く舌打ちをして首筋についているデバイスの電源を切った。

「って…いつの間にかに電源がついてンじゃねェか。」

「電源？なんだよそれ？」

「あア？…これがねェと、今の俺は能力が、たった15分しか使えねェんだよ。」

まア、予備はたンまりとあるが、もったいねェだろオ？

つーか、テメェまで、なんでこの世界に来てンだ？」

「制限があるなら、なんでさっきまであんなに能力使いまくってたんだよ！？」

「何言ってやがる？俺はこの戦場に来てから一度も能力を使った覚えはねェ！！」

「じゃあ…さっきまでは一体…」

「あれ〜？一体どうしちゃったのかなあ〜？」

女の声が2人の耳に届いた。

声がした方向を見ると、そこにはマントを羽織った小柄でフサフサした髪をした女性がいた。

見た感じからすると、海兵ではなさそうだ…私服っぽいし…
だが、”白ひげ”の船では、まだ見たことない顔だった。

…彼女のはいている”網タイツ”からして、インペルダウンの脱獄囚だろうか？なんか分からないけど、脱獄囚の中には”網タイツ”を吐いている奴が結構いたし…

「その子は私の支配下にあったはずなのに…なんで洗脳が解けてんの？」

「洗脳？支配？どういうことだ？」

「…つか、てめエ…インペルダウンの脱獄囚じゃなかったのかア？同じ船に乗ってたから、てっきり脱獄囚かと思ったぜエ」

「まっさかー！私はね……」

バサリつとマントを裏返すと……そこには白地に”正義”の文字が……

「私は海軍本部の中佐・ヨークシャー！」

インペルダウンに駐屯中の海兵で、あんたが軍艦を襲っているときは、たまたまトイレに行ってたから助かったのよ。

で、あんたのせいで死んだり瀕死になった海兵達の敵討ちをするために、脱獄囚になりすまして行動を共にしてたってわけ。

幸いにも、私…網タイツはいてたし……」

「…でもよ、どうやって洗脳したんだよ…こいつを。」

「簡単簡単！私は超人系悪魔の実…”ファタファタの実”の能力者。簡単に言えば、対象者に幻覚を見せる能力なんだけど……ちよつとばかり、条件が合ってね……」

「条件？」

「そう。それは一度、幻覚を見せる対象者の背中に触れないといけないのよ。」

だから、さつき落ちてくるときに、貴方の背中に触れさせてもらってたわ。

で、あとは貴方に幻覚を見せるだけで完成！

私の幻覚は超一級ものだから、幻覚をかけた相手の意識を奪い、洗

脳状態にすることなんてお手の物なのよ。入隊したのが最近だから、中佐だけど…実力は少将にだって負けな
いって思うわ。」

うつすらと笑みを浮かべて話すヨークシャン。

「で…あなたにかけてた洗脳は何か分からないけど…解けたみたい
だわね…」

でも、洗脳したのは貴方だけじゃないのよ!!」

その言葉を言った瞬間、上条と一方通行をズラリと取り囲む脱獄囚
…バギーについていたはずの脱獄囚からイワンコフについていた
脱獄囚まで…さまざまな脱獄囚に取り囲まれていた。
いや…脱獄囚だけでない。

ここに来てからさらに、洗脳した人を増やしたのだろう…なかには
”白ひげ”の海賊も交じっていた。

「さあ…終わりよ!!」

さっき貴方は『15分しか使えない』って言ったわよね?

私が貴方を洗脳して、貴方の能力を使ったのは14分56秒。

電源をつけたとしても、たったの4秒で何ができるって言うの?

さあ…やってしまいなさい!!!」

海賊やら脱獄囚やらが一斉に彼らを襲う。

が……

「てめエ…自分の都合のイイとこしか聞こえてねエンじゃねエの？」

キンッという音がしたかと思うと、彼らを囲い込むように襲いかかっていった海賊やら脱獄囚やらが、とたんに吹っ飛んでいった。

「デバイスの替えは、たんまりあんだぜエ？」

「こ…この4秒の間に…取り替えたの？」

「俺を誰だと思ってンだア？」

学園都市最強の能力者だぜ……もつとも、今はどうだか分かんねエがな……」

ニタリ…と笑う一方通行。

「つく…なら……『剃^{ソル}』!!！」

6種類の超人的体技…通称…”六式”のうちの瞬発的に加速し、消えたように移動する歩行術…”剃^{ソル}”を使い、瞬時に上条の後ろへ回るヨークシヤン。

「貴方はさっき、この子の攻撃が効かなかったわよね〜！」

じやあ貴方を洗脳して、この子を倒してもらおうわ!」

トンつとヨークションが上条の背中に触れる………が、

「あれ？」

何も起こらない……上条は苦笑した。

「あゝ…たぶん、俺の右手の影響だと思う…。

この右手のせいで”テレパス念話”が聞こえなかったし、黒子の”テレポーション瞬間移動

”も効かなかったしな…」

「そ…そんな……」

「ンじゃア…覚悟はいいかア？」

一方通行の能力が炸裂する。

あっけなくヨークションは”反射”され、氷の割れ目から海へと落ちて行った……

「うわ…相変わらず恐ろしい能力だな……」

「テメエの能力の方が恐ろしいだろオ……

まア、俺は先へ行くぜ」

彼の視線はすでに打ち止めの方を向いていた。
ラストオーダー

「んじゃあ、俺もさっさといかねえとな。」

一方通行とは反対方向…モビードイック号の方を向く上条……だったが……。

「なんだよ…アレ……」

彼の目に映ったもの…それは……

数十体の、まるで”クマ”のような耳の生えた巨大な男がズラリと並んでいたのだった……

第15話 昨日の敵は今日の友（後書き）

一応オリキャラ紹介をしておきます。

・ヨークシャン

所属…海軍本部・少佐でインペルダウンに勤務中（警備するため）

性別…女

容姿…ヨークシャン・テリアみたいに小柄でフサフサした長い髪の毛の持ち主

悪魔の実…ファタファタの実

（ファンタジーⅡ幻術ということ）

対象者の背中に触れることで、触れた相手に幻覚を見せ、幻覚を強めて洗脳まですることが出来る。

一方通行に再起不能にされた部下たちの敵を取るため、脱獄囚のふりをする。

見事、ダイビング中に一方通行の背中に触れることができ、洗脳することが出来たのだが、上条さんの右手のせいで計画がすべて崩れ、最終的には海に落とされた。

海の落とされたので、たぶん今後の出番はない……と思う。

第16話 ヒーローは遅れて登場する

「…とうとう来たわね……」

美琴はゴクリ…とツバを飲んだ。

開戦から約1時間半……七武海のバーソロミュー・くまと同じ姿の
パシフィスタが約20体も現れた…

”パシフィスタ”とは、海軍の天才科学者Dr. ベガパンクの改造
手術による「人間兵器」……

王下七武海バーソロミュー・くまを再現した肉体をベースに鋼鉄以
上の硬度を持ち、口からは大将黄猿のレーザーを再現した金属をも
溶かすレーザーを発射する事が可能とした…人間兵器…

ちなみに、1体造る費用は、軍艦1隻分に相当するらしい……。

そのパシフィスタを率いているのが、海軍本部科学部隊隊長……Dr.
ベガパンクのボディガードで、黄猿の部下である”戦桃丸”
……名前だけ聞くとパシフィスタ同様、人間兵器のようなものを想
像するかもしれないが、こちらはれっきとした人で、昔話に出てく
る”金太郎”のような姿をしている。

「…つく…ここまでは原作とあまり変わってないわね…
ラストオーダー
何故か打ち止めが処刑されそうになっていることと、氷塊が解けな
アクセラレータ シスターズ
かった事と落ちてきたメンバーに一方通行と妹達とボンちゃんがい
た以外は…」

原作通り…少し前に傘下の船を”白ひげ”の命令で移動させておい
たため、包囲することが出来なくなったのに、それでも…包囲梓か
らはずれた”白ひげ”傘下の船から攻めていく海軍…

こうやって船の上から戦場を見ていると分かる…原作通りにパシ
フィスタが現れた途端…海兵たちが氷上から引き下がっていく様子
が…

逃げているのではない…誘い込んでいるのだ…これから海賊た
ちが目の当たりにするであろう…地獄へと…

「…でも、そんなこと…させないんだから！
…ん！？」

その時…一人の男が船に上がってきたことに気が付いた美琴…
その人物が誰であるか気が付いた途端、ため息がこぼれた。

「…はあ…仕方ないわね…」

その人物はどんどん近づいてくる…

「止まりなさい！」

美琴は指の上にコインを乗せると、手を男の方に突き出して言い放った。

自分の額から、緊張のせいか、うつすら汗がにじむのが分かった。

「…そこをどいてくれねえか…嬢ちゃん？」

「どこかないわよ…」大渦蜘蛛スクアード」……あなたは間違ってるんだから…」

目の前にいる男…大渦蜘蛛海賊団船長で額に蜘蛛のマークを持つ海賊…”スクアード”を美琴は睨みつけた。

「私の話を聞きなさい！聞かないと……うつわよ？」

コレの威力は一度…見たと思うけど？」

開戦直後に美琴は超電磁砲^{レールガン}を一度、放っていた。その威力は海軍大將の黄猿のレーザーに匹敵するほどだということは、スクアードも見えていたはず……

こうやって脅しをかければ……話を聞いてくれるはず……美琴はそう思っていた。

だが……

「すまねえな、嬢ちゃん…」

「え…っ!？」

スクアードが瞬時に美琴との距離を詰めてきたのだ!

近づいたところまでわかったが、急なことで慌てた美琴は、とっさに能力を使おうとしたのだが、手遅れだった。

「かはあっ!！」

スクアードの拳が一発、美琴の腹に入った。腹の空気が抜けて…気が遠くなっていく……

「嬢ちゃん的能力は確かに強い…だが……

実戦経験は俺の方がはるかに上だ……悪く思わないでくれ。」

どこか苦しげに言うスクアード……

「ま…待ちな…さい…」

だんだんと端の方から暗くなっていく視界……美琴は去っていくスクアードを引き留めようと、必死に手を伸ばしたが……視界が完全

に黒く染まり……意識が飛んでしまった。

「ちくしょー！おい、御坂！しっかりしろ！！」

数回、ゆするが起きる気配がない美琴。……だが、脈はあるみたいなので、上条当麻はひとまず彼女は置いておくことにした。

美琴の様子からして、気絶したのはついさっきの事……だと思う。

美琴から戦争開始前にもらった情報から考えると……これをやった人物は1人しか思いつかない……

この船に乗っているのは……美琴の他に……”白ひげ”が乗っているが、まさか彼が手を下したとは考えにくい……となると……

「……もう、スクアードって奴が来てるのか！？

やばいじゃねえか！このままじゃ……」

上条は”白ひげ”がいるだろうと思われる方向に走った……このま

まだと……原作通りに”白ひげ”がスクアードに裏切られ、刺されてしまう……!!

何としてでもそれを阻止しないと……!!

「スクアード！ 無事だったか さっきでめエに連絡を」

「ああ…すいません…オヤツさん！

後方、傘下の海賊団はえらいやられ様だ……!! ハア」

「持てる戦力は全てぶつけて来る……!!」
後ろから追われるんなら望む所だ。

俺も出る!! こっちも一氣に攻め込む。

他にねエ!!」

「そうですね おれ達も全員 あんたにや大恩がある。

白ひげ海賊団の為なら命もいらねエ!!」

あと1つ…角を曲がれば…”白ひげ”の所にたどり着く!!
っというところで、2人の会話が聞こえてくる。

上条は必死で走った。

そして……上条が角を曲がった時……

今まさにスクアードが大刀を引き抜く瞬間だった。

それを見た白ひげは、よもや自分を貫くためだとは思っていないらしく、再び前を向いた。

「やめろおーーーー!!」

力の限り、上条が叫ぶのだが……

時、すでに遅し……

スクアードの身の丈ほどもある大刀が……”白ひげ”の腹を……

「七閃」

上条や”白ひげ”はもちろん……当のスクアードにも何が起きたか分からなかった。

ただ、急に手から腕、それから足にも痛みを感じよろめいてしまい……気が付くと、握っていたはずの大刀が床に落ちていた……

「まったく……まさかこんなところにまで首を突っ込むとは……
本当にお人好しですね……上条当麻……」

上条が見たのは、2メートルほどもある日本刀の柄に手を置いている…、ジーンズの片方は太腿の際どい所まで切断して露出し、Tシャツの片方の裾も根元まで切断しているという斬新な服装をした黒髪ポニーテールの美少女……

天草式十字凄教の女教皇で、プリエステスイギリス清教会「必要悪の教会」に所属する魔術師であり聖人……神裂火織が”白ひげ”とスクアードの間に立っていたのだった。

第17話 安堵よりも疑念の方が広まりやすい

マリنفォードの住人達は、現在：避難勧告が出ており、避難先のシャボンディ諸島からモニターによって人々は公開処刑の様子を見守っていた。

各所より集まった記者やカメラマンもまたここから世界へ情報を一早く伝えるべく身構えている…。

そしてたった今、そのモニター越しに映っている映像に誰もが釘付けになっていた。

「……ええ。……それが刺そうとしたのは”白ひげ”傘下の海賊団船長……新世界の海賊”大渦蜘蛛……!」

「なんで反旗を？」

「それよりも、あの女は何者なんだ!？」

「いきなり現れたが……」

「どうか、どうやってスクアードの剣をはじいたの!？
なにも見えなかったんだけど!？」

彼らの興味の対象は、”白ひげ”を刺そうとしたスクアードではなく、彼を止めた謎の美少女だったの方が圧倒的に強かった。

「か…神裂!？」

上条当麻は目の前に現れた女…神裂火織を見て啞然としていた。彼女は確か…イギリスにいるはずなのだ。なのになんでここに？

「まったく…本当に何にでも首を突っ込むのですね？先日もアドリア海で一騒動したそうだと聞きましたが？」

「!! そうだ! それで思い出した!

ロンドンにアニエーゼやルチア達が言ったと思うんだけど……その…元気にしてるか？」

つい数日前に大覇星祭最終日。上条は大覇星祭の来場者数ナンバーズで1等を当て、北イタリア5泊7日のペア旅行を手に入れたのだが……イタリアのヴェネツィアで起きた魔術関連の事件に巻き込まれてしまったのだった。そして…その中心にいたローマ正教のシスターがアニエーゼというシスターとその部隊のシスターだ。

元々、その前に”法の書”という事件の関係で失態をしていたアニエーゼ部隊だったが、先日”アドリア海の女王”の事件で正教から離反し、イギリス清教の傘下に入ることとなったのだった。

「ええ…清教の女子寮で元気に暮らしていますよ。」

「そうか…よかった……ってかなんで神裂がここに!？」

俺みたいにマンホールに落ちたみたいには見えないし……」

「あなたはという人は……………」

呆れた感じの目で上条を見る神裂……

「実は……………」

「スクアードオ……！！！」

神裂が説明しようとしたときに、どこからともなく不死鳥姿のマルコが飛んできて、呆然としているスクアードを取り押さえた。

「うるせエ……！！」

こうさせたのはお前らじゃねエかア……！！」

取り押さえられているのにわめくスクアード。

「こんな茶番劇やめちまえよ……！！ 『白ひげ』……！！」

もう海軍と話についてんだろ……？

お前ら『白ひげ海賊団』とエースの命は助かると確約されてんだろ……！！？」

「！！」

「何言っただ……？ どういう事だ……！！？」

「おれア……知らなかったぞエースの奴が……あのゴールド・ロジャーの息子だったなんて……！！！！」

おれがアンタに拾って貰った時……!! おれは一人だった……!!
!! لماذا だか知ってるよな!?

長く共に戦ってきた大切な仲間達をロジャーの手で全滅させられた
からだ……!! おれがどれだけロジャーを恨んでるか知ってるハズ
だ……!!

……だったら一言、言ってくれりゃあよかった……!! エースはロ
ジャーの息子であんたはエースを次期『海賊王』にしたいと思っ
てると……!!

……その時はすでにおれアお前に裏切られたんだ……エースとも仲
良くしてた……バカにしてやがる……!! そしてお前にとってそれ程特
別なエースが捕まった……!!

だからお前はおれ達傘下の海賊団43人の船長の首を売り……!! 引
き替えにエースの命を買ったんだ……!!

白ひげ海賊団とエースは助かる……!! すでにセンゴクと話について
る……!! そうだろ……!!?

そんな事も知らずにどうだ……!!? おれ達は……!! エースの為白
ひげの為と命を投げ出しここまでついて来て、よく見ろよ……!!

海軍の標的になってんのは現に……!! おれ達じゃねエか……!! 波の水
に阻まれてすでに逃げ場もねエ……!!」

ここまで一気に叫んだスクアード。

周囲に動揺が走ったのが船の上にいる上条に出さえ分かった。

確かにあの人造人間……サイボーグ……パシフィスタは、傘下の海賊団達しか現在
は攻撃していない……

集団心理…というのだろうか？

少しでも納得してしまい、疑い始めるともう止まらない。

あっという間に疑念が伝染していくのだ。

まあ……冷静になれば誤っていることに気が付くのだが、もともと戦場という場所は混乱しやすい場所……冷静になる方が難しいのだ。

「ハア…ハア………！！」

オヤツさァん！！？本当かよォ~~~~！！！！」

「ウソだろそんなわけ………！！」

「言われてみりゃコイツらおれ達しか狙わねェぞ」

広まっていく疑念の渦……。

とはいっても、”白ひげ”が刺されなかったために、原作よりその度合いはかなり低いのだが、それでも疑念は広まっていく……。

「信じたくなかった…おれァ目を疑ったよ………！！！！」

「バカ野郎！！！！担がれやがったなスクアード！！！！」

なぜオヤジを信じない！！！！」

「てめェまでしらばっくれやがって、マルコォ！！」

だいたい、俺を止めたその女や、トリップしてきたとかいうガキ共も、本当は海軍の手のモノなんじゃねえか！？」

「はい？」

思わず間拔けな声を出してしまった上条……。
酷い言いかりだ。言い返そうと口を開けたその時……

「……海軍とはなんですか？」

真顔で神裂がスクアードに尋ねた。
場がしーんっと静まり返る……。

「えっ……神裂？お前……まさか……この世界知らない？」

「はい。知りませんよ？…それがなにか？」

「……えっと……簡単に説明すると、世界政府直属の海上治安維持
組織……かな？」

で、俺とか親父……えっと……今刺されそうになってた人とか、あのあ
たりにいる人たちは海賊で、つかまっているエースっていう人を……
……ほら、あそこにいるだろ？海軍がアノ人の処刑をしようとしてる
から、阻止しようとしているんだ。」

「……そうですか……あなた達は海賊ですか……」

神裂が”白ひげ”を……次にマルコを……スクアードを……最後に戦場
を眺めた。

もう少しうまく説明出来たら……と上条は思った。
世間一般に”海賊”という悪役……好印象のわけがない。

「偏見の目は持ちませんよ、上条当麻。」

「へっ!？」

「：貴方が”親父”というほどの人物が悪人のわけありませんから。そうでなくても、いかにも”裏切り”というような感じで刺されそうになっている人を助けられないわけにはいきませんからね。」

「へっ!口では何とでも言える!

正直に言ったらどうだ?」

スクアードがまだ吠えていた。上条はムツとした。

刺されそうになったのを目撃した時から、まるで噴火口のすぐ下で辛うじて押さえられていたマグマが吹き出しそうになっているような気持だった。

それが今、完全に噴火した。

「いい加減にしろよ!!!」

上条の声がマリンフォード中に響き渡った。

「お前さあ、親父を何で信じられないんだよ!？」

この人が本当に家族を売ると思うのか!？本当にエースと己のことしか考えていない様に見えるのか!？

確かに俺はまだ親父の事をよくわかんねえ。

でもよ、短時間一緒にいただけでも、この人がそんなことする人だとは思えない!!ましては長年一緒にいたならなおさらだろ？

父親を信じられなくて、何が家族だよ!!笑わせるぜ!!」

スクアードの顔から怒りの色が消えた……といっても、改心したのではない。

呆然としているだけだ。

「みっともねエじゃねエか!!! 『白ひげ』 エ!!!!

おれは、そんな『弱エ男』に敗けたつもりはねエぞ!!!!」

「……………」

「クロコボーイ……!!」

「クロコダイル」

……避けられたはずなのだ。

神裂が助けなくても、体調が全快だったのならば、例え心を許した仲間の攻撃だろうと最強の海賊である”白ひげ”がああ程度の攻撃に反応できない訳がない。

それだけ……彼は弱っているのだ。

その時、いままで黙っていた”白ひげ”が動いた。

「スクアード……おめエ仮にも親に刃物つき立てるとは……とんでもねエバカ息子だ!!!」

「ウアア!!!?」

「バカな息子を……それでも愛そう……」

”白ひげ”がスクアードを許すかのように、片膝をつき、スクアードを抱き寄せる……

その姿は本当に息子を許す父親のよう……

「…ウグ……!!?」

ふざけんな!!! お前はおれ達の命を……!!」

「……忠義心の強ェお前の真っ直ぐな心さえ……闇に引きずり落としたのは…一体誰だ」

「…海軍の!!! 反乱因子だ…お前を刺せば部下は助かると!!!」

赤犬、サカズキ大將は”絶対的正義”を旨とする海軍の中でも、一際苛烈・過激に正義を徹底する硬骨漢。

その思想には幾分の揺らぎもなく、たとえ民衆や味方の海兵であっても自身が『悪』と見なせば容赦なく始末する。

その冷徹さを目の当たりにした上条は、思い出して鳥肌が立ってきた。

そんな奴が海賊に対して結んだ口約束を守るはずがない。

……新世界の海賊なら、それくらいの情報を知っているだろうに。

「『赤犬』がそう言ったか…お前がロジャーをどれ程恨んでいるか

……それは痛い程知ってらァ…。

…だがスクアード、親の罪を子に晴らすなんて滑稽だ…エースがおめェに何をした…!?」

仲良くやんな…エースだけが特別じゃねェ…みんなおれの家族だぜ…」

「!?!」

その言葉に涙を浮かべるスクアード……やはりどこかで”白ひげ”を…親父を信じていたのだろう。

「まったく……衰えてねエなアセンゴク………!!
見事に引っ掻き回してくれやがって………!!」

じろり…とセンゴクを見る。

そして…”白ひげ”は両腕を外に向かって振るいおろそうと……

「ストップ!!!」

「!?!」

「み…御坂!?!復活早っ!!!」

もう復活した美琴が…よほど焦ったのだろう。肩で息をしていた。

「親父は病気でもう歳でしょ? 両方の氷壁はきついって。
片方は私がやるわよ。」

コインを片手でいじくりながら、まっすぐ”白ひげ”を見る美琴…

「それに、怪我もしてるんでしょ? ……って…あれ? なんぞ怪我

していないの？」

「それなら、神裂が止めてくれたぞ。」

「かんざき？……？」

神裂を見る美琴……すると美琴の表情にその……なんというか……”焦り”と”とまどい”の色が混じった。

「グラララ……ミコト……やるならやろうぜ？

お前はそっちの方の氷壁を頼む。」

”白ひげ”に声をかけられハッと我に戻る美琴。

「了解！」

ピンっと音を立て、美琴の手から放たれ空を舞うコイン……それが再び指に戻った時、超電磁砲^{レールガン}として光の閃光が放たれ……

一瞬で氷壁は粉碎された。

「海賊なら信じるものはてめェで決めろオ……！！！」

反対側では”白ひげ”がグラグラの実を用いて当然のことだが、氷壁の破壊に成功していた。

これで退路が出来た。動揺が収まるに違いない………だが……

（このギスギスした空気………なんとかならないのかな？）

上条をはさみ、だんだんと険悪な感じになってきた神裂と美琴………。

彼女たちが同時に上条に問いたですまで、あと5秒……。

第18話 女の説教って結構、一方的で長い

「上条当麻！私の見ていないところで何をやっていたか説明してもらいます！！」

「アンタ！！私の見てないところで何やってたのよ！！」

上条に神裂と美琴のギスギスピリピリとした声がとんだ。
……上条に2人のステレオ説教が続く……

「まったく…緊張感のない奴らだよい……」

先程まで…というか今も戦場だということを忘れているらしい3人
（…正確には美琴と神裂の2人）に向かってポロッと口にしたマルコだったが……

「アンタ…なんか文句あんの？」

「少し黙っていてください。」

ジロリ…っとマルコをにらむ美琴と神裂……

…一瞬、2人から覇王色の覇気……のような気迫を感じ、少し後ずさりするマルコだった。

「グララララ：若いのはいいな。」

「親父：笑っている暇があるなら、トウマを助けるよい……」

「なんだあ？」

女の戦いを止められる奴はいねえよ。ああなったら、好きなだけやらせておけばいいのさ。」

まったく気にしてない……というより、むしろ楽しんでいる” 白ひげ”……

そんな中……

上条に降りかかる不幸……をさらに悪化させる人物がもう1人……参戦していた。

「だからあなたという人は……能力がその右手しかないのに、自分の命とかどうと考えているのですか!？」

「本当にいっくつも女が絡むと一気に思考力・行動力がアップするわけ？」

「あなたは何故、自分を顧みないで危険の中に飛び込んでいくのですか、っとミサカは問いただしてみます。」

「……なんか1人、ミコトそっくりなのが混じっているん気がするんだが……気のせいかない?」

「グララララ……気のせいじゃねえな。」

一方……微妙な空気が流れていたのは、海軍側も同じだったりする。何しろ、上条へのステレオ説教はマリンフォード中に響き渡っているのだった。

……聞きたくなくても耳に入ってくる……

「……ふん。まあいい。」

内輪もめをしている最中に、”包囲壁”を発動させろ！」

センゴクは、緊張感がまるでなくなった戦場にため息をつくど、部下に命令したのだが……

「しかし……まだ、電伝虫が一匹……行方不明でして……

まだ回線が切れていません!!」

「早く見つけ出せ!!」

「そ……それが……脱走した囚人の一味が持っているとのことだったので、青キジ様が凍らせたはず……だったんですけど……」

口ごもる海兵……

「早く言わんか!!」

「ミサカが持つてるよ、ってミサカはミサカは女の戦いに面白いから参戦してみたかたったりするんだけど、出来ない身を嘆きながら言ってみる!!」

セングクの隣で鎖につながれたままの打ち止めが、無邪気に言い放った。

「…ミサカとはもしかして……」

「えっとね…ほら!今、説教している人の中にゴーグルかけた子いるでしょ?

あの子!!…ってミサカはミサカは素直に教えてあげてみたり!!

原作知識に基づいて、少しでも”包囲壁”の作動を遅らせるために、ミサカは電伝虫をバギーたちから強奪したみたい…とミサカはミサカは…って聞いているの!?”

「……なんだとおおお!!!!!!」

セングクは絶句した。

ようするに……

まあ…現在のシャボンディはこんな感じだ。

『だから！聞いてるわけ！—！？—！？』
『本当にあなたという人は——！！！！——！！』
『——ってミサカは——！！』

3つあるモニターの中で唯一つながっているモニターからは、まったく戦況とは関係ないことしか流れていなかった。

「おい！！いつまでこれは続くんだ！！」
「”白ひげ”やエースをうつせ！！」
「つーか、こいつら何者だ？」
「そもそも、この少年は？賞金首か！？」
「処刑はまだかよ！！」

クレームが殺到する民衆……

「はっ！！ざまあねえな！！」
「何をやっているんだ…海軍は…？」
「…哀れな……」
「…この状況がいつまで続くか占ってみるか……」

影からこっそりと戦況を見ていた超新星達^{ルーキー}が意外とこの状況を楽しんでいたりしたのは、別の話……

…さて、ようやく解放されたのは、それから15分後のことだった。

「…はあ……」

「ため息をつくな。ここは戦場なんだぞ？」

「分かってるって……ってステイル!？」

上条の前に立って煙草を吸っていたのは、赤髪にバーコードの入れ墨を頬にいれた…どこから見ても”不良神父”という風貌な男……イギリス清教の魔術師…ステイルⅡマグヌスがそこにいた。

「いつからそこに!？」

「……お前が説教受けている間だな。」

「じゃあ…助けてくれてもよかったじゃねえか……」

恨めしそうにステイルを見上げる上条……

「出来るかよ。」

それに…お前のお蔭で手に入れられたからな。」

満足そうにサイン色紙を見せるステイル……

見るとそこには、”白ひげ”のサインとマルコのサイン…ついでにスクアードのサインに……

「なんでMr. 2のサイン!？」

「ああ。ルーンを張っている間に会った。」

「……ってか、お前って…ワンピースの読者だったのかよ……」

意外そうな目を向けると、ステイルは真っ赤になった。

「うるさい!人の趣味に口出しするな!!」

それよりも……なんでまだ”包囲壁”が作動しないんだ?」

話題を変えるステイル……

その言葉は、ああ…ワンピースって世界中で読まれてんだな……と、ボンヤリと思っていた上条を、一気に戦場に引き戻した。

「なんだよ、それ!？」

「ああ…それでしたら…まだミサカが電伝虫を手に行っているからです
ね…と言いなからミサカはソレを掲げてみます。」

周囲の人に電伝虫を見せるミサカ…。

「へえ…意外にかわいいかも…ちょっと見せてよ!」

「お姉様はゲコ太にうつつを抜かしていればいいのです、っとミサカは渡したくないので、そういつてみることにします。」

「うつつ…て!! そ…そんなことないわよ!!」

「ってか、今は関係ないでしょ!! さっさと貸しなさい!!」

「いやです、とミサ…」

「いいから! 妹でしょ!!」

「いやなものは嫌です!!」

「よこせ〜!!」

「放しません!!」

ゴキィ!! ボキィ!!

「「あっ……」」

結論

ミサカと美琴が引っ張り合ったため、一匹の電伝虫がお亡くなりになりました。

「グラララ……仲のいい姉妹だな。」

「親父……樂觀的すぎだよ……」

なんか緊張感がまるでない船の上だった……

「よし……ようやく通信が切れたぞ……」

切れ方がちょっとアレだったが、気を取り直すセンゴク。

幸いなことに、上条に対するステレオ説教は海軍・海賊の目を引くものだったので、一旦、戦闘がストップしていたのだ。

まあ：ルフィはそんな中でも助けようとしていたのだが、その間は3人の大将に遊ばれていたりする。

「“包囲壁”を作動しろ！！」

3人の大将がルフィから一気に遠ざかって、陸地に上がったのを確認した途端！セングクが叫んだ。

その瞬間！！

ゴゴゴゴゴ！！！！と陸と海を遮断する壁が、海賊たちの氷上に閉じ込めたのだった……………！！

第18話 女の説教って結構、一方的で長い (後書き)

くおまけく

エース「…な。アレを見て分かっただろ？
どう考えてもアノ女は俺に気があると思えるのか？」

エースは遠くにいる美琴を指差して言った。

美琴は凄い勢いで上条を怒っているが……
それは誰の目から見ても”嫉妬する女”そのものだった。

ガープ「……………」

エース「…ジジィ？」

ガープ「なるほど…そういうことか………」

エース「ようやく……」

ガープ「お前…強姦したのか!？」

エース「おい!!!!いきなりR15的発言してんじゃねえ!!!」

ガープ「…なるほど……」

本当はあの娘は、あの少年のことが好きなのに、エースによって犯され……

子まで作るはめになったということか……

だから、エースを助け、自分自身の手で復讐を下すために……」

エース「ストオオップ!!!!」

待て待てジジイ!!!勘違いだからな!そんなことあるわけねえだろ!!!」

打ち止め「み…ミサカの出生にそんな秘密があったなんて……」

って、ミサカはミサカは面白そうだからガープさんの話に乗って、涙を流してみたり!!!」

エース「誤解を生むからやめろ!!!」

ガープ「エース!!!見損なったぞ!!!」

エース「だから聞けよ!!」

エースの不幸という名の誤解はまだまだ続く……

第19話 身内しか知らないことを他人が知ってたら焦る（前書き）

11月15日、大幅改変しました。

第19話 身内しか知らないことを他人が知ってたら焦る

「な…なんだよアレ!!」

上条当麻は、目の前にそびえ立った壁に目を見開いた。

さっきから、海賊たちが、それぞれの必殺技や、大砲を使い、壁を打ち破ろうとするが……全く効果がない。

見るに見かねた”白ひげ”も参戦し、グラグラの実の力を使って壁を破壊しようとするが、あまり効果がなかった……それほど、強固な壁ということだ。

「…包囲壁よ。」

「ホウイヘキ……って……包囲壁か!？」

「他に何があるって言うのよ……」

馬鹿か?っと言う感じで上条を見る美琴。

「つてめ!!なんでそんな余裕なんだよ!？」

「余裕に決まってるじゃない!」

ニィッと不敵に笑う美琴。

そして、側にいる上条にだけ、やっと聞こえるくらいの大きさの声

で、こう言った。

「大丈夫…策はあるんだから。」

……一気に湾内を囲む”包囲壁”

みると、壁には大砲が撃てるように穴が開いていて、全ての砲口が海賊たちに標準を定めていた。

……ただ、よく見るとうまく作動できていない箇所が1つだけあった。

「おい どうなってるんだ!!!! 完璧に作動させろ!!!!」

さっきから計画通りに進んでいないセンゴクは、苛立つ声を隠せなかった。

「……それが、包囲壁があのおーズの巨体を持ち上げきれず……!!
どうやら奴の血がシステムに入り込み、パワーダウンしてる模様で
……!!」

見ると、序盤で倒れたオーズが包囲壁と包囲壁の間に挟まっている。
ますます、センゴクの眉間のしわが酷くなった。

まあいい……目的さえ達成できれば……

そう……この包囲壁の最大の目的は、海賊共の足場である水上を溶か
すことで、まず、能力者を溺れさせ、溺死させることができるとい
うこと。

いくら”最強の男”と称される”白ひげ”とはいったって、彼だっ
て悪魔の実を食べ、海に嫌われた人間……泳げるわけがない!

それに……奴らの逃走用の船で”白ひげ”の象徴……モビーディック
号も沈めることができ、海賊共の退路の確保を困難にすることが出
来るからだ。

「締まらんが……!! 始めろ赤犬……!!」

”流星火山”」

巨大な無数の溶岩の拳が氷の足場に向けて放たれ……

「」? 魔女狩りの王……!!」
イノケンティウス

突如放たれてたその言葉と共に、姿を現した炎の巨人が、赤犬の溶岩が氷上の海賊たちには届かないように覆いかぶさった。

溶岩が巨人に当たるが…巨人の方が温度が高いので、びくともしてない。

「…誰の能力じゃ!?!」

この戦場で他に炎系統の能力者は処刑台のエースしかない……
ちらり…と処刑台を見る赤犬だったが、彼は目を丸くしてこちらを見ている……それ以前に海楼石の手錠をしているから、能力は使えないはず……

「一体……!?!」

赤犬の身体がグラリ…と揺れた。

巨人が赤犬に攻撃を仕掛けたからではない。

包囲壁がいきなり、ドンドン下がりはじめたのだ!!

「な…なんだ!?!」

「これも、罠なのか!?!」

「お…俺たち囲まれてたのに……」

なんで、あっさり元に戻ったんだ!?!?」

素直に驚きが出てしまう海賊たち。

彼ら海賊を閉じ込めるための包囲壁の高さが、一気に下がり始めて……とうとう元の平らな土地にもどってしまったのだ！

「おい！！一体何が起こったというのだ！！」

センゴクが包囲壁を支配する部門に電伝虫を用いて尋ねてみると、そこを担当の海軍の巡査の、慌てたような声が聞こえてきた。

「わかりません！！」

ただ、何者かにハッキングされたらしく……どうも無理矢理入ったような痕跡がありますので、そこから逆探知をしているところですよ！！」

「ハッキングだと！？」

ばかな！！となると、そいつは、この計画を事前に知っていたといことでないか！！」

……海軍関係者が、両親や子供に伝えたのか？

いや……ここに集めたのは海軍の”正義”に忠誠を誓ってもいい！！

……といった海兵達ばかりだ。その海兵の中でも、凄腕の人が勢ぞろいしている、

そんな海兵達から、機密情報が漏れるとは思えない……

……一体、何が起こったんだ？

そもそも…あの炎の巨人は一体……

「私の体は、常に微弱な電磁波を流している…って言うことを利用してね……

ちよつと、管理部屋にハッキングかけてみたら大成功だったみたいね。

包囲壁が下がって、元通りになったし。」

「ハッキングって……犯罪じゃないのか!？」

得意そうに話す美琴をたしなめるステイル…
それを言われ、ムッとしたような顔をした美琴。

「いまさら、何を言ってるのよ!!」

「だいたい、”海賊” 自体が犯罪者でしょうが!!」

「そもそも、貴方…どう見ても学園都市の人間じゃなさそうだけど…
なんで能力使えるの?」

胡散臭そうに先程、言霊を唱えると同時に炎を出したステイルを見る美琴…。

「彼女は『魔術』を知らない。だから彼は『パイロキシネス発火能力者』かと思えたのだが……」

「赤犬の能力に対抗できるくらいの炎を出せる能力者なんて聞いたことがなかった。」

「それよりも!! なんて、おまえたち魔術師までこの世界に来たんだよ!?!」

『魔術サイド』のことをバリバリ『科学サイド』の人間である美琴に知られるのは少々不味い……」

「だから話題を変えるために、さっきから聞きそびれていたことを聞こうとする上条。」

「それを聞いたステイルは煙草を口にくわえた。」

「…そうだな…説明してやるか。…実はな…」

「まったく……説明は、あとでいいですから。」

それより、いつまで、ここでグズグズしているつもりなのですか？」

ステイルの言葉を遮り、そう言い放つと、突然、神裂が船から飛び降りた。

上条のようにだらしなく落ちる（落下する）のではなく、スタっ…と音を立てないで着地していた。

「おおい！！神裂！！いきなりどうして……？」

「あなた達…馬鹿ですか？」

あの”エース”という人を助け出しに来たのではないのでしょうか？」

「あっ………」

すっかり忘れていた上条達だったりした…。

包囲壁が発動しないで終わった…だから、海賊たちの広場への侵入を、海軍はやすやすと許してしまっていた。

内部で第2ラウンド…つとでも言うのがふさわしそうな、戦闘が繰り広げられている。

「おい！ここは女が遊びに来ていいような場所じゃないんだぞ！！」

そう言って、神裂に刀を振り下ろす、大柄な海兵がいた。

それに引き替え細身の体型をした神裂……体格差は歴然としていて、誰もが海兵の勝利を確信した。

「死ね！海賊め！！」

だが、彼らは知らない。

今…海兵が殺そうとしている女は…神裂火織は、元の世界で”聖人”といわれるほど、強い戦闘能力を持っている事を……それは、この世界に来てからも健全で、

「七閃」
ななせん

神裂の手が柄に伸び、刀を引き抜いた瞬間！！

「ぐ…ぐわあ！！！！」

いきなり体中から鮮血が噴き出す。

痛みのあまり、海兵は神裂に振り下ろそうとしていた刀を落とし、

その場でうめいてしまった。

「命はとりませんが……先を急いでいるので……!!!!」

先に進もうとしている神裂の前に、黒い斬撃がはしる。

辛うじて斬撃を避けた神裂。黒い斬撃が飛んできた方を見ると……

「……いきなり襲うとは……礼儀知らずですね」

神裂は黒刀を手にした男……王下七武海の1人にして”最強の剣士”……ジュラキュール・ミホーク……通称”鷹の目”をにらむ。

神裂はミホークを知らない……が、彼が強いことは、先程の斬撃で分かったので、気を引き締めた。

……下手をすれば……自分が負けるかもしれない……

そう思うくらい、彼は強そうな気迫を放っていた。

「……俺の黒刀の斬撃を避けるとはな……

一角以上の剣士のような。どうだ？一本手合せはどうだ？」

黒刀の先端を神裂に向けるミホーク……

神裂は、はぁ……っとため息をつくど、刀の柄に手を置いた。

「仕方ありません……お相手いたしましょう。」

第19話 身内しか知らないことを他人が知ってたら焦る（後書き）

以前、s o l aさんが感想で書いてくださった『御坂のハツキング能力』を使わせていただきました！っとはいっても、ハツキング能力を使うのは包囲壁だけに対して…ですが…

第20話 ” 救われぬ者に救いの手を ”

「…拔刀術か…？」

刀の柄に手を置いている神裂火織を見るミホークだが……

「…いや…違うな。」

先程の考えを自ら否定するミホーク。

神裂は少し驚いてしまった。

確かに彼の言うとおり、今から使おうとしている技は、拔刀術ではない。だが、それを対峙しただけで見抜いてしまったのが分からなかった。

「なぜ…違うと思ったのですか？」

なるべく『驚いている』という感情を見せないように、平静を務めてミホークに問う。

「…先程、海兵を倒した技…それから” 白ひげ ” を助けた技…どちらも刀を引き抜いた様子が見えなかった。

代わりに、七本のワイヤーのようなものが一瞬、光に反射して見えた。

……引き抜くふりをして、本当は鞘に隠してあるワイヤーで攻撃していたのではないか？」

「……当たりです。ここまで短期間で見破られるとは思いませんでした。

ですが、私の技は”七閃”ななせん だけではありません。

”七閃”を抜けたところで、今度は”唯閃”が待っています。」

「……ほう……他にも技があったのか……
ぜひ見てみたいものだ……」

世界最大の黒刀……”夜”を構えなおし、神裂に襲い掛かった。

神裂は、2 m以上もある日本刀……”七天七刀”をスラリッと引き抜いた。

キィィィン！！！！！

”七天七刀”が”夜”の斬撃を受け止める。神裂の足が少しだけ地面に食い込んだ。

(…重い…一撃の一つ一つが……ですが!!…)

神裂は力を入れ直し、”夜”を押し返す。

その反動を利用して、後方へバク転をし、ミホークから距離を取った。

「…ほう…」

想像していたよりも俊敏に動く神裂を見て、感心したような声を上げるミホーク。
か弱い女かと思っていたが、そこそこな手練れのようにだ。
気を引き締めないとな…と思ったとたん！！

「！！！！！」

キイイイイン！！！！

一気に距離を縮めてきた神裂の七天七刀を受け止めるミホークの”夜”。

(…：…反応できなかったな…)

近づいてきた神裂の速度に対応できなかったミホーク…。
彼女の刀を受け止め、攻防戦を繰り返されていられるのは、彼女の速度を彼が見切っているからではない。

身体が…本能が…自分の体に刻み込まれた歴戦からの経験…といった自分の意識と関係のないものが、ミホークの体を動かし、刀を振るっていた。

「…なかなかやりますね…」

「……お前…何者だ？」

お前のような剣士の噂など、耳にしたことがない。」

「……私は、イギリス清教『必要悪の教会』ネセサリウスに所属する魔術師です。」

「魔術師？」

あまり耳にすることのない言葉に眉をひそめるミホーク。

グランドライン

偉大なる航路の島の中には、魔術師やらなんやらといった”オカルト”は存在しているが、どれもこれもインチキ臭いモノばかりだ。

（例・ナマクラ島・貧困の国「ハラヘッターニャ」）

が、剣を交わして直感したのだが、この女が、嘘をつくとは思えない…

恐らく、本気で”魔術”オカルトを信仰しているのだろう…っと、神裂と剣を交わしながらミホークは考えた。

「…”魔術師”オカルトが”火拳”と関わりがあるとは思えんな…」

「”火拳”？ なんですかそれは？」

「……知らないのか？」

お前は、あの男…を助けに来たのではないのか？」

眉を上げて、驚きの意を示すミホーク。
そのまま片目で処刑台の方をチラリと見て、”あの男”が誰なのか
神裂に教えた。
神裂もその視線の先を見て、ミホークの言う”あの男”が誰だかを
悟った。

「私は別件でここに来たまでのこと。

”ポートガス・D・エース”を見たのは今日が初めてです。」

「別件だと？」

「あなたに話しても理解できませんよ。」

「……なら問おう……。」

なぜ、”火拳”の処刑の邪魔をするのだ？」

「……そう言えば言っていないませんでしたね……私の魔法名を……」

「魔法名？」

ピクリ……と眉を動かすミホーク。

そんな彼を見て「そういえば、この人は魔法を知らなかったな……」
っと思う神裂。

神裂は無表情をなるべく維持しながら、口を開いた。

「もともと魔術師は己の目的のために力を振るう人の集団です。

そして”魔法名”とは、その己ごとの”信念”という主観的目標を
刻んだ名のこと……

……私の魔法名は……」

彼女の脳裏に浮かぶは、元々所属していた『天草式十字凄教』の面

々…

自分が持つ聖人としての強運のせいで、代わりに傷ついている周りの面々…

自分が救われるために、代わりに救えなくなってしまった面々…

常に自分のせいで傷つくものがあるということ……

だから、誉れ高き女教皇の座を辞してまで、異国の教会に加入したのだ。

そんな神裂が己に刻んだ魔法名…それは……

「……」 — S a l v a r e 0 0 0 《救われぬ者に救いの手を》 !
「!!」

神裂の刀から一瞬、光が放たれ、一気にその力も速度も増した。

「…これで…魔法名は”殺し名”と呼ばれることもあります。

私は……処刑されそうになって居るあの人に手を差し伸べるため…
あなたを倒します!!」

「?!」

一方通行には何が起きているのか分からなかった。
アクセラレータ

何故、自分が傷を負っているのだろうか？

しっかりデバイスの電源は入っている……反射もしっかり行っている……

自分の演算は完璧なはず……!!なのに……!!

「ヒヤハハハ!! まだやるつもりかよ!!」

”正義”の文字を背負った巨漢の男の拳が一方通行に襲い掛かった。

もちろん、反射をして跳ね返そうとする一方通行だが……

「ぐはア!!!!」

その拳は反射されることもなく、彼の顔面にクリーンヒットした。

「そんな…一方通行が…っとミサカは驚愕の色をあらわにしてみます。」

そのそばで呆然とそれを見ているミサカ…。

彼の能力…反射は、確実に行われているはずなのに……

あの巨漢の男の拳には効いていない……悪魔の実の能力でもなんでも反射する彼の力が…効いていないなんて……

「…往生際が悪いなあ!! さっさと倒れてくれないか?
この俺様は、こんな命令を終わりにして、とっとと3億の首を取りにいきてえんだっての!!!!」

……原作には登場していない男……ゴクリ…とミサカは唾を飲んだ。

「……分かっていないみたいね……」

少し離れたところからこれを見ている、小さな影があるとは、一方通行もミサカも思ってもみなかったのだった。

第20話 ”救われぬ者に救いの手を” (後書き)

原作にないオリキャラ登場です！

あつ…でも、次回は番外編を執筆予定なので、本格的な登場はそのあとになるかも…。

番外編 もし”白ひげ”海賊団2番隊隊長が『禁書目録』の世界に来てしまったら

思いついた番外編です。

本編とは全く関係ありません。

「あぢーーー」

どっと流れ出てくる汗……上条当麻は目が覚めた途端、とてつもない暑さに悩まされていた。

「…ゲツ！エアコン壊れてら……
昨日のビリビリ女の雷のせいかな？」

とりあえず、栄養補給をするために冷蔵庫を開けるが……

電気類がすべてやられていたので、冷蔵庫の中から変なおいがした。

「全滅か……」

って……うわあ！！水漏れが！！制服がつ！！借りてた漫画あ！！！！」

ぐしゃーっとなっている上条宅の床……

腐臭があたりかしこに漂っている……

（分かってたー分かってましたよ！！）

夏休みになったからって、空から幸運が降ってくる訳じゃないってさー！ー！！！！）

もう泣くしかない……とりあえず、びしゃびしゃになっていない制服を着る上条だったが……

その時、何かに気が付いた……

「ん？布団？いつの間に干したんだ？」

何かが自宅の手すりに干されてある……上条がベランダに出て確認してみると……

「！！！！！！？」

白い服に青い髪に同じ色の瞳をしたシスターさんと……

……上半身裸でボサボサとした黒髪の男が干されていた。

（お…女の子！？うわっ！シシシ…シスターさんだ！！

ってか、隣に何で上半身裸なお兄さんが！？…ってかよく見ると拷問受けたような傷あるんだけどー！！！！…ってか…背中のもって刺青！？）

上条が反応に困っていると……シスターと男は目をさまし……その眼が上条を捕えた。

「オー——」

「ニ————」

な……何か言おうとしている……上条は聞き取ろうと真剣な顔立ちになった。

「おなかへった……」

「肉ううう……」

「……………」

学園都市……超能力でさえ人の手で作り出す、この科学の町で……

その白いシスターと上半身裸の入れ墨男は七階^{ウチ}のベランダに引っかかっていた。

それが……夏休みの始まりだった——。

ガツガツガツ……むしゃむしゃ……ふがふが……

上条の家に唯一残っていた食料を食べつくしていく2人……
っというか、上半身裸の男はどこかで見ただことがある気がするのだ
が……思い出せない上条だった。

「まずは自己紹介しなくちゃいけないね。」

シスターの方が、一旦食事を止めて口を開いた。

「私の名前はね、インデックスっていうんだよ？」

見ての通り教会の者です。」
インデックス

「目次？」

……って誰が聞いても偽名じゃねーか！」

「あ！」

バチカンの方じゃなくてイギリス清教の方だね。」

「意味わかんねえし!!」

妙だぞ……つと上条は思った。

この町のセキュリティーは一級品だ……このどっからどう見ても外
部の少女……ってかシスターがどうやって入り込んだんだ？

……昨日のビリビリ中学生が引き起こした大規模停電のせいで、一
時、セキュリティーがマヒしたのかもな……

「で、そっちは？」

「ん？俺か？俺は――」

ガタン！！！！

「「えっ？」」

インデックスと上条の声が重なった。

目の前でいきなり男の頭が、がつくんと落ちたのだ！

……男はまるで死んだように動かない……

「ちょ……ええ！！俺、この年で逮捕とかされたくねえんだけど……！！」

「ま……まさか……実はこの食べ物に毒物が混入されていたりとか……」

「ふ……不吉な事いうんじゃない……！！」

不幸だ……夏休み初日から……こんなことが起きるだなんて……

ずうーんんと落ち込む上条。

「……大丈夫だよ、君は何もしてないって、出来る限り私が弁護してあげるから。」

可哀そうなくらい落ち込んでいる上条に、優しい言葉をかけるインデックス。

「…うう…見た感じ13くらいの女の子に慰められる高校生って…まあ、慰めてくれて、ありがとな。」

ポンポンっと右手でインデックスの肩を叩く上条……………

はらり

「なっ／＼／＼／＼／＼！！！！！！」

上条は自分の顔が真っ赤になるのが分かった。

なぜなら、突然、インデックスの修道服が……………修道服が脱げて…彼女が全裸に……………

それに気が付いたインデックスの目が潤み始め……………

「イダダダダダ！！！！！！」

インデックスの鋭い歯が上条の頭に襲い掛かったのだった。

「うゝ…よく寝た…ん？どうしたんだ？」

死んだように眠っていた男が目を覚ました時、上条は噛み付かれた痛みで、なんか泣きそうだった。

「……できた」

「なんかウケるな！針のむしろみてえ！！」

何も知らない男が、元の形に戻りはしたものの何十本もの安全ピンでギラギラしている修道服を着たインデックスを見て笑った。
インデックスは何か言いたそうな顔をしていたが……男の余りにも邪気のない笑いを見て、言う気が失せたようだった。

「で、アンタは？」

「俺か？俺はエースっていうんだ。おめえーは？」

「俺は上条当麻。」

「私はインデックス。よろしくね、えーす！」

「こちらこそ、よろしくな！トウマにインデックス！！」

にかぁーっと笑うエース。

「…ん？ エースって言ったか？」

「ん？ 俺を知ってるのか？…って、知ってるか。」

「ってか、俺…処刑されそうになって…ルフィの奴かばって死んだはずなのに…なんで生きてんだ？」

「胸に赤犬に穴開けられたと思ったんだけどな…？？」

「頭上に？を浮かべるエース。」

「…ルフィ…ってまさか…！！！」

友人の青髪ピアスから借りていた漫画…ワンピースを取り出す上条。

「やっぱり！！」 火拳のエース”！！！！…って…逆トリップって奴か…！！！！？」

「逆トリップ？なんだそれ？」

「どうま…分かるように説明してほしいかも…！」

「う…ん…えっと……」

「つまりエース…さんのいた世界ではなくて、エースさんは別世界に飛ばされてきた…ってことになりますね。」

上条の説明を聞きながらエースは、まだ腹が減っているのか…菓子を食べている。

「ふ…ん…別世界か……って………」

エースは少し考え込んだ。

「別世界…か…まだ、勝手がよく分からない。だからすまないが、しばらくここに置いてくれないか？」

「私はいくよ。」

玄関に向かって小走りで歩くインデックス。

「行くって…お前！命狙われてるんじゃないか！？」

「命って…ほんとかよ！？」

真剣な顔になるエース。上条も引き留めようとするが、こけたりなんだり、逆にインデックスに笑われてしまっていた。

「危ない目に逢うって分かってて、お前を外になんか放りだせねーだろ…！」

「トウマの言うとおりだ！なんかよくわかんねえけど、命が狙われてるなら、俺が守ってやるっての…！」

「…じゃあ…私と一緒に、地獄の底までついてきてくれる？」

インデックスが2人に問いかける。

上条は、何て答えたらいいか分からなかった。

「ああ、ついて行ってやるよ。」

エースが言ったとき、インデックスは信じられなような顔をした。

「俺の弟は、俺を助けるためだけに地獄の底まで本当に降りてきやがった。」

なら、兄である俺だって、誰かのために地獄の底まで下りていく勇気がなくてどうすんだって話だ。」

にかあつと笑うエースをポカンつと見るインデックス……だったが……

「へ……平気だってば！教会まで逃げればかくまってくれるはずだし……！」

そう言って彼女は走り去っていった……

……のだが、エースとインデックスと上条は数時間後にまた顔を合わすことになる……でもそれは……また次の機会に……

番外編 もし”白ひげ”海賊団2番隊隊長が『禁書目録』の世界に来てしまった

また次の機会に…とか書いてますが、次の機会があるかどうか……
まだまだ未定です。

次回は本編に戻ります!!

第21話 漫画に出てくる図体デカイキャラって馬鹿が多い

「つく!!!? どうなってんだア!!!?」

何故…先程から男の攻撃が…反射しているのに当たるのが、一方通行^{アクセラレ}には理解できなかった。

こいつもあの…先程ボッコボコに女どもに説教されていた少年と同じ力があるのか…っとも思ったが、そのようには見えない。

あの少年は、自分の”反射” 自体を消していたのだ。

だが、目の前の男は”反射” しているのにもかかわらず、拳を当ててくる。

なぜだ?…学園都市N01の能力者の脳は思考を続けた。

「……っち…まだ倒れねえのか…:はやくしねえと大物の首までとって一気に准将まで4階級もUPしようと思ったのによお!!!計画が台無しじゃねえかよっと!!!」

そう男がつぶやくのを、殴られ続けている一方通行は聞き逃さなかった。

(…今…奴はなんて言ったんだ?)

一方通行は”自身の”ベクトルの向きを操作し、一気に海兵から距離をとった。

「ヒヤハハハ!!! 何だ!? 逃げんのか?」

狂気じみた笑いを浮かべながら男は走ってくる。

……やはりバカだ……

弱い者が引いたら追ってくる……自分を恐れ…逃げているのだと思
って…

こんなバカに負けていたのかと思うと、一方通行は反吐が出そうに
なった。

「俺がただ逃げると思っただけのかよ…三下がアア!!」

「何を言っている!!! 貴様はただ逃げているだけじゃないか!!!」

一方通行を追おうとする男だったが、追おうとすると海賊(無名)
が現れ、男の行く手を阻む。

そのたびに拳で殴るわけだが……ココは戦場……敵は次から次へと
湧いてくる。

そいつら一人一人に相手をしているうちに、目的であつた『一方通行』の姿を見失つてしまつていた。

「つくそ……どこに行きやがつた……!？」

自慢の拳をふるいながら逃げた一方通行を探す男……

が、”逃げた”と思つてゐるのは男だけで、一方通行は逃げたつもりはなかつた。

わざと距離を置いて逃げたふりをし、他の海賊たちに男の相手をさせることで、何故、自分に拳を当てることが出来たのか……ということと、男の先程漏らした言葉について考えていた。

（奴の口ぶりから考えると、奴は大尉……。それに加え、誰かから指令を受けて動いているのかもなア：

ハッキリ言つて奴は馬鹿だ。俺が下がつたを見て、ただ逃げたと思つてノコノコと追つてきやがつた。

まともな奴なら何か策かもつて疑うぜエ……普通は。）

一方通行は男の戦いを見ていた。

男の拳の威力は強い。しかも速い……異様に早い……だが、それだけで、特に能力を持つてゐるようには思えなかつた。

（つたく…このまま別の奴に任せてても構わねエンだが…：性に合
わねエー！。

俺の”反射”…っていうか”ベクトルの向きの変換”かア…それ自
身を打ち消しているわけじゃねエンだから、どこかに突破口が…：）

そこまで考えた時…：不意に気が付いたことがあった。

彼の口がニヤリ…：と曲がった。

「あるじゃねエか…：馬鹿を倒す策がよオ！！」

「…はあ…：はあ…：…つたく…：あのガキイイ…：どこへ…」

「よオ…：俺が相手してねエ間に、ボロンボロンじゃねエか？」

男の視界に一方通行が入った。

男の表情が途端にゆるんだ。

「ヒヤハハハ！！！！わざわざ殺されに来てくれたのか！！：雑魚が！
！！！！」

男はまっすぐに一方通行に接近し……

「グフアアア!？」

突如として地面にたたきつけられた。

何が起こったか分からない……突如として何か巨大な力が男を襲ったのは事実だ。

「てめ…何を…!!!!」

一方通行の方を見ようとした…が…すでに遅し。

一方通行は倒れている男の背中に足を乗せて、能力を発動させた。

「グギヤアツアアア!!!!」

一方通行の足が途端に重くなり、地形が変わるくらい地面に沈む男が、醜い悲鳴を上げた。

…ミシリ…ミシリ…とあばら骨及び全身の骨が鳴る……

「どうしたア? 俺を殺さねエの？」

「ぐう……なんだコレは……」

「何だ…俺の力しらねエの？」

俺の力は”ベクトルの向きを変換させる力”……それは万物に値すんだぜエ?」

「!?!?」

一方通行の言っている意味が分からない男……苦痛と理解できないの
とで顔をゆがませる。

「つまりだァ……三下にも分かりやすく説明してやるよォ……」

まず、テメエの上の”風”が進む向きを操って、箱の中に空気をた
めた密閉空間を作り出したわけだ。

ンで、その密閉空間の下の面だけ、ベクトルの操作を行わねェよう
にした……言うならば、箱に穴を空けた……ってわけだ。

ンで……その穴をテメエに向けた状態で、密閉空間の側面を一気に
反射で叩きつける

……簡単に言えば、テメエの上空に”空気砲”を作り出して、一気に
ブチ放したってわけだ……

もっとてっとり早く済ませても良かったンだけだよォ……念には念を
って事だァ。」

悪魔の笑みを浮かべる一方通行は、そういう間にも男への制裁を止
めない。

「テメエの力はただすばやく動けるってだけだ。嫌……ちげェな……
拳がクソ早ェだけだ。」

つまりだァ……俺の反射が適用される前に、手首を返す、つまり手
前に引くことで、ベクトル変換を逆手にとって、テメエの拳を俺に

引き寄せてたってわけだァ。」

どうやら凶星だったらしい…男の顔色が悪化した。

「さて…だが、俺の能力については知らなかったみてェだな……
ってことは、こいつには必要最低限の戦法しか与えてねェってこと
か……」

おい…テメェ…返答次第では、その苦しみから解放させてやる……
正直に答えろォ…

テメェにこの方法を教えたのは誰だァ？」

男は涙目で一方通行を見上げた。

「か…海軍……本部…中将…」見聞色の覇氣”の使い…手の…」ア
イズ”様で…す…」

「どこにいた？」

「そ…そこまでは………」

一方通行は舌打ちをした。そしてほんの一瞬…能力を解いた。

男はほっとした感じの顔になった……

「た…助かった…」

「アアン？何勘違いしてんだ？」

一方通行が笑う。

「命を助けてやるなんて…言ってねえぜ？」

戦闘不能な男を反射で遠くへと弾き飛ばした。

男は人ごみの向こうへ消えていった…：…なんかデカイサイボーグみたいなのがウロチョロいるところに弾き飛ばしたので、おそらく命はないだろう。

「…まったく…俺をここまで追い詰めるなんて…：…”アイズ”って奴はどこだア？」

一方通行は一旦…助けるべき少女のことを置いて、その海軍中將を探すことにした…：…

今後の害にもなりかねない、その中將を…：…

第21話 漫画に出てくる図体デカイキャラって馬鹿が多い（後書き）

オリキャラの名前：出さないで終わったな……

えっと：彼は海軍の大尉で、馬鹿です。

ですが、拳の速度が「黄金聖闘士にも匹敵すんじゃない？」ってくらい早いという設定です。

そこを買われ、オリキャラ中将”アイズ”の部下になります。

で、アイズの命で、一方通行抹殺に動き出します。

なんとなく木原みたいな攻撃ですが、何度も言うようですが、木原みたいに頭良くない馬鹿で、考えるのが苦手なので、一方通行の能力については教えられていなくて、ただ「こうしたら勝てる」としか教えてもらっていません。

なんか：かませっぽいキャラになったな……ってか、かませですね。

ですが、中将アイズは”かませ”ではありません。

この人についてのことは、現段階ではまだ『見聞色の覇気』の使い手……とだけだしておきます。

第22話 他に好きなキャラがいたら、主人公が空気になっていることが多い

オレンジ色のレーザーが、数体のパシフィスタの腹を貫く。
その後から遅れて響く、レーザーのゴガツつと言う音……

「あゝ！！スカツとする！！」

そういう間にも、キンツと指でコインを弾き超電磁砲レールガンをパシフィスタ目がけてぶっ放し撃ていく御坂美琴がいた。

いくつか腹に穴が開いたパシフィスタは派手な爆発音とともに散っていく……

その様子を、まるで、ゲームセンターのゲームのように結構楽しみながら壊していた。

「こりゃあ！何をやっとりんじゃ、小娘！！！！」

まるで金太郎を思わす風貌をした男：戦桃丸が美琴の前に立ちふさがった。

「何って…あのデカブツを壊しているに決まってるじゃない。」

っといっている間にも一体のパシフィスタがズカアアアンっ音を立てて爆発していた。

「つく！！パンク野郎がどんな思いをして作ったのか知らんで…！！！！」

アシガラドッコイ

”足空独行”！！！！

「まずっ！！！！」

慌てて磁力を操り、砂鉄で防御壁を作る美琴だったが……

「くはああ！！！！」

戦桃丸の突っ張りを抑えきれずに、宙を飛んだ。

…なんとか地面に激突する寸前に砂鉄をクッションのように操ることとで、ダメージは抑えられたが、それでも身体がふらついてしまう……

（長期戦は無理そうね…）

美琴はチラリ…と、処刑台を見て今がいつ頃なのかを確認した。

…まだ、エースも幼女も首が繋がっている……

ぶろううん……っというまるで蜂の音を何十倍にもしたような不可思議な音が戦桃丸の耳に響く…。

見てみると、黒い鞭のようなものが、何十メートルもあるレイピアのようなものが空中を漂っていた。

「…なんじゃいそれ？…砂鉄か？」

目を凝らしてみると、砂鉄の巨大な塊が磁力によって操られ、振動しているらしい……

「さてと…行くわよ!!」

砂鉄の鞭が、戦桃丸に襲い掛かった。

……さて、この物語では空気と化しているルフィは……

青キジの氷の槍で右肩を貫かれ、その痛みでうめき倒れていた。

「お前のじいさんは恩人だが……

仕方ねえよな、男一匹選んだ死んだ道。」

青キジはそういうと、ルフィにとどめを刺そうと構えた…時!!

「イノケンティウス!!!!」

青キジに炎の巨人が襲い掛かった。
あつという間に炎の中に閉じ込められる青キジ…

「はあ…はあ…アレは…さっきの…？」

「大丈夫か！！？」

2人の人物がルフィに駆け寄った。

「……少し休んだ方がいいぞ。」

「関係ねェ！！俺が……エースを助けるんだ！！！！！」

気力だけで立ち上がろうとするルフィ。

「あらら…暑いねえ…」

イノケンティウスの炎には”覇気”がないため、青キジを”水”にしただけで、復活を許してしまった。

……が多少はダメージがあったようだ。

「おい、上条当麻！ルフィの援護をしろ。

三大将はここで僕が少しでも食い止める。」

「ステイル！？大丈夫か？」

「問題ない。先程、市街地全域にルーンを張ってきた。」

「……そっか……行くぞ、ルフィ!!」

フラフラなルフィの腕をつかみ、走り出す上条。

「先程の小僧……!! 逃がすか……!!」

身体を溶岩に変えてルフィと上条に襲い掛かる赤犬……だったが……

「いかせるかよ。」

ステイルがその間に入り込み、イノケンティウスで対抗した。

「……!!? ワシの炎が……!!」

驚く赤犬。それに引き替え余裕の表情を見せるステイルは、煙草をふかしていた。

「……僕のイノケンティウスの温度は3000℃。
マグマなんかよりずっと上だ。」

「怖いねえ……新手のロギア系能力者だね。」

そこまで『怖い』とは思ってなさそうな顔をした黄猿がつぶやいた。

「…さてと…どれだけ食い止められることやら…」

炎の剣「吸血殺しの紅十字」を発動させ構えるステイル。

…ぶっちゃけ、先程からイノケンティウスを酷使しているせいで、体力の減りが半端なかった。

が、元の世界に帰るには…ここで『麦わらのルフィ』と最低でも『エース』か『白ひげ』を生かさなければならぬ。

ここでルフィに無茶させてもう一発『テンションホルモン』を撃たせるより、体力を温存させておいた方が好都合だ…とステイルは考えていた。

「…はあ…はあ…アイツ大丈夫なのか!？」

ルフィが少し前を走る上条に尋ねた。

「問題ないさ。ステイルは…あの炎は人を護るための力だからな。」

…人と言っても、一人のシスターの少女だけだが…それでも『守るための力』には変わらない。

「…それよりも、大丈夫じゃないのはお前だよ!!」

「問題ねえ!!」

「いや、ボロボロだろ!! 御坂妹が言ってたぞ!!」

『猛毒を喰らったりしてフラフラなのに、テンションホルモンで痛みを忘れてる』って!!

あとで……」

「あとで俺の体がどうなっても構わねえ!!

それよりも……エースを助けられないほうが、死んでも死にきれねえ!!」

荒い息とともに放たれる主人公の言葉……それは彼の覚悟……
ルフィ

「……はあ……俺の不幸指数高まりそうだな……」

上条はため息をついた。

「じゃあ、出来る限り助けてやるから、無理すんなよな、主人公!
」
ルフィ

「ありがとな……えっと……」

「俺の名前は……上条当麻だ。」

「そっか! ありがとな、トウマ!」

2人の主人公が処刑台を目指す。

……エース処刑まで……あと数刻!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5727x/>

とある魔術の頂上戦争

2011年11月20日14時52分発行